

# 浅野誠

# 教育

2013～2023年

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」に掲載した2013～2023年記事のなかの「教育」関連のものを編集したものだ。記事の大部分は、2019年以降である。それ以前のは、未収録のものを収めた。また、2022～2023年記事の多くは、以前なら「授業・ワークショップ」に収録していたものだが、今回は、ここに統合収録した。

2020年ごろから、連載型の記事が大半を占めるようになった。それらのタイトルを紹介しておこう。

「近代以降の沖縄における学校外（家族・地域など）教育」 8回

「教育での思い違い」 6回

「(続) 教育での思い違い」 6回

「習う」と「教える」 5回

「レクチャ型大学授業をやめない大学教員がなぜ多いのか」 8回

2023年2月刊行

## 目次

※項目冒頭の年月日は、ブログ掲載日。ほぼ掲載日順に配列している。

<b>2022～2023年</b>	<b>5</b>
2022年12月28日～2023年02月06日 レクチャ型大学授業をやめない大学教員がなぜ多いのか	8回連載
2022年05月10日 年4回の沖リハ授業スタート	
2022年05月28日 クライアントとの信頼感あふれるつながりをつくっていきそうな素晴らしい学生たち	
2022年01月14日 新著「沖縄の子ども」届く	
<b>「習う」と「教える」連載</b>	<b>14</b>
2021年06月25日 ナラースンの展開と教育改革 「習う」と「教える」連載5最終回	
2021年06月20日 明治期の学校創設にともなう「教育」≡「教化」の登場 「習う」と「教える」連載4	
2021年06月14日 ウチナーグチは、「教える」「教育」に相当する言葉をつくらなかった? 「習う」と「教える」連載3	
2021年06月09日 「教える」という言葉は昔から使われていたわけではない 「習う」と「教える」連載2	
2021年06月04日 子どもの教育についての親の権利と義務 「習う」と「教える」連載1	
<b>「教育での思い違い」連載</b>	<b>19</b>
2021年05月29日 実践検討会 実践交流 (続)「教育での思い違い」連載6	
2021年05月24日 実践記録を書く (続)「教育での思い違い」連載5	
2021年05月19日 自分のしている教育活動を「反省」(再帰)的に行う事 (続)「教育での思い違い」連載4	
2021年05月15日 教育している意識がない「教育する人」が多い (続)「教育での思い違い」連載3	
2021年05月11日 自己教育 (続)「教育での思い違い」連載2	
2021年05月06日 教育にかかわる膨大で多様な担い手 (続)「教育での思い違い」連載1	
2021年05月01日 学校史に限定されていた40年前までの沖縄教育史記述 「教育での思い違い」連載6	
2021年04月25日 学校への疑問の広がり 「教育での思い違い」連載5	
2021年04月20日 学校が教育していること 人生創造・進路選択 「教育での思い違い」連載4	
2021年04月14日 学校が教育している比率 自己管理 対人関係 読み書き算 「教育での思い違い」連載3	
2021年04月08日 「教育とは学校教育のことだ」という思い込み・思い違い 「教育での思い違い」連載2	
2021年04月03日 教育での思い込み・思い違いは多くて大きい 「教育での思い違い」連載1	
<b>学校外(家族・地域など)教育</b>	<b>29</b>
2021年02月02日 3～6個も部活をして楽しんでいる高校生	

- 2020年12月19日 南城市「こどものまち」宣言の素晴らしい文案を子どもたち自身が作る
- 2020年11月14日 家族の教育の新たな展開 学校外（家族・地域など）教育8最終回
- 2020年11月09日 都市部の変化 学校外（家族・地域など）教育7
- 2020年11月04日 「地域の教育」の多様な展開 学校外（家族・地域など）教育6
- 2020年10月28日 共同体（シマ）の教育 学校外（家族・地域など）教育5
- 2020年10月23日 家族における教育2 学校外（家族・地域など）教育4
- 2020年10月18日 家族における教育1 学校外（家族・地域など）教育3
- 2020年10月15日 こどものまちワークショップ
- 2020年10月13日 沖縄教育史の歴史 学校外（家族・地域など）教育2
- 2020年10月10日 「沖縄の子ども・教育・福祉 2013～2020年」をホームページに掲載
- 2020年10月08日 沖縄と南城についての新連載のあらまし  
近代以降の沖縄における学校外（家族・地域など）教育1

## 2019～2020年

38

- 2020年08月25日 大学リストラへの動き 新しい大学教育創造の模索
- 2020年06月03日 中学生高校生が読む本、神谷拓『僕たちの部活改革 部活自治・10のステップ』かもがわ出版  
2020年
- 2020年04月17日 鈴木庸裕・住友剛・榎屋二郎編著『「いじめ防止対策」と子どもの権利』かもがわ出版2020年
- 2020年03月27日 1970年代～2000年代前半に私がしてきたことを思い起こす 久々の全生研
- 2020年01月24日 「エーッ」と驚きが多い ヨルダン教育関係者に「日本教育史」の講義をする
- 2019年11月17日 大学入試における記述式をめぐる問題 大学教育と入試のつながり 大学教員の力量増大
- 2019年11月22日 大学入試における記述式をめぐる問題（続き） 入学試験から大学教育は始まる

## 2013～2017年

45

- 2017年08月10日 嘉納英明「子どもの貧困問題と大学の地域貢献」名桜大学発行沖縄タイムス発売2017年を読む
- 2017年08月07日 丹野清彦「今週の学級づくり」高文研2017年を読む
- 2017年07月23日 鈴木庸裕「学校福祉のデザイン」かもがわ出版2017年を読む
- 2017年02月07日 本ブログ記事を編集した「教育2008年～2015年」をHPに掲載
- 2016年12月19日 近年の若者の人間関係と「希望」 土井隆義「ネット・メディアと仲間関係」に触れつつ
- 2016年09月05日 鈴木庸裕・佐々木千里・住友剛「子どもへの気づきがつながる「チーム学校」」かもがわ出版2016年
- 2016年08月23日 地域起こしに教育が登場しない不思議
- 2016年08月26日 福祉・観光などを含む地場産業を担う中小零細企業の開発創造力向上に対応する教育の追求
- 2016年06月08日 お任せHR研究会編著『これならできる主権者教育 実践アイデア&プラン』学事出版2016年
- 2016年05月31日 親世代の仕事のありようが焦点 「共働き 共子育て」 NHK取材班「超少子化」ポプラ社2016年を読む

- 2016年03月23日 特別支援学校の生徒と教師たちの素晴らしさ 授業参観の仕方 生徒の相互関係を育む
- 2016年01月27日 「カリキュラム・イノベーション 新しい学びの創造へ向けて」東京大学出版会 2015年を読む
- 2015年12月16日 山本健慈「地方国立大学 一学長の約束と挑戦」高文研 2015年を読む
- 2015年08月09日 「浅野誠エッセイシリーズ7 大学」完成 HP掲載
- 2014年04月29日 「教育の理論・世界の教育」をHPにアップロード
- 2014年04月12日 「浅野誠エッセイシリーズ3 子育て・教育」のホームページ掲載
- 2014年03月09日 藤原幸男先生最終講義
- 2014年01月19日 「浅野誠エッセイシリーズ1 フィンランドの教育と仕事」のホームページ掲載
- 2013年08月21日 久富善之他編「ペダゴジーの社会学——バーンステイン理論とその射程」
- 2013年08月08日 デジタル・アーカイブの時代 私の「大学と教育」掲載論文がインターネットで読める
- 2013年07月23日 茂木俊彦「子どもに学んで語りあう」(全障研2012年)に触れて
- 2013年06月05日 「浅野誠沖縄論4 沖縄の子ども・教育」HPへアップロード

## 2022～2023年

2022年12月28日～2023年02月06日

### レクチャ型大学授業をやめない大学教員がなぜ多いのか

#### 1

1970年代末に、私は大学授業のほとんどが「連続講演」式のレクチャ型になっていることについて、問題ありとの提起をした。しかも、1、2年生対象の大規模授業がそうになっている。3、4年対象の授業では、少人数で討論・共同作業型の実習・演習型が多いのとは対照的である。

いまでは、初年次教育といわれる工夫が少しはされるようになってきたが、今も昔も多くの授業ではレクチャ型授業がなされている。1970年代末から1980年代に、私が所属していた琉球大学教育学部では、多様な授業形態を多くの教員が作り出し、学生たちは、黙って聴いていさえすればよいレクチャ型とは異なって、自分たち自身がなにかしなくてはならない授業に、教員も学生も「忙しくて大変だ」といいながらも、知的にも身体的にも多様な活動が必要な授業を楽しんでいた。

2010年代に、再び琉球大学教育学部で非常勤講師として授業を担当し、ワークショップ型授業を展開した。学生たちは異口同音に「こんな授業は受けたことがない」と語った。1980年代には同じような授業していても、私が突出していたわけではなかった。当時、多様な授業形態があるので、学期当り20単位以下の履修が平均であり、全国の教育学部のなかで、ダントツの少なさであった。当時「大量単位授受」が問題となっていた全国の教育学部では、平均単位取得数160～180であったなか、琉球大学教育学部は、130単位台にとどまっていた。それは、学生が多様な作業・討論をしあう授業をいくつも同時並行で受講するのが難しかったためだ。かつての大学設置基準は、講義は1時間当たり2時間の予習復習、また演習は1時間の予習復習が必要と言うタテマエであったが、実際は、講義の予習復習は限りなくゼロに近く、演習は逆であった。そのなかであって、当時の琉球大学教育学部の講義では、2時間以上の授業外学習を必要とするものが多かったのだ。

1990年代末から2000年代に入って、大学授業の改善がいわれ、さまざまな試みの波のように広がっていく。私が「大学の授業を変える16章」(大月書店1994)「授業のワザ一挙公開：大学生き残りを突破する授業づくり」(大月書店2002)を発刊したのは、そうした波が表面化する直前ないしは、広がり始める時だった。

波が広がったにもかかわらず、現在では、実際の改善が進んでいる印象を受けない。ないしは、改善速度は大変緩やかなものだ。学生アンケートによる授業評価とかFD委員会設置とかは、どこの大学学部でも行われているようだが、それが授業改善の実績につながっているのだろうか、大変気がかりになる。

#### 2

前回述べたレクチャ型大学授業が多い原因は、多様な角度から検討できよう。

たとえば、教室の形に注目してみよう。固定机椅子の大規模教室であれば、受講生が教師の話を聴くだけ（加えて、ノートを取る）の授業スタイルに適合する。そこでは、隣の学生と討論することは想定されていない。話をすれば、「私語」として禁止対象になる。学生が声を出すのは、教師の質問に応えるか、教師に質問をする時だけだ。

そんな教室が、いまだに教室の大部分を占める大学が多い。とくに文系大規模大学に著しい。その教室で討論や共同作業を含んだ授業をするには、特段の工夫と努力が必要だ。そんな教室では授業改善を進めにくい。

それは教育経費とからむ。そういう授業では、教員の人件費以外に必要な経費は、教師がコンピュータ等を使って画像を提示したりするための設備や拡声装置設備などの経費にとどまり、いったん設置すれば、日常的経費はゼロに等しい。だが、多様な形で授業をすれば、日常経費が結構かかる。板書授業で必要となるチョークの経費の比較にならない。一番多いのは、プリント印刷経費だろう。それ以外の経費として、私の授業の文房具例をあげよう。ポストイット、模造紙、フェルトペンなどが大量に必要だ。文房具以外にもいろいろと派生する。

そこで、私が最後に専任教員を務めた中京大学教職科目担当組織では、授業のための必要経費を予算化して、専任教員のみならず非常勤講師にも、必要物購入予算を割当てていた。私の場合、年間10万円内外の支出だった。私は沖縄でも他府県でも、いくつかの大学の非常勤講師を務めたが、そうしたものを予算化している所に会ったことがない。予算化するほど多様な物件を必要とする授業は、例外なのだろう。例外である私は、そこでやむをえず、私に非常勤を依頼してきた担当専任教員にお願いして調達していた。

教室規模に話を移そう。60~600人という大規模授業であれば、学生一人あたりに必要な経費、教員人件費にしる、必要物件にしる、限りなく低額となる。それは大学経営上の効率は特段にいい。逆に小規模受講生で多様な形態をする授業では、効率は大変に悪い。

### 3

前回はいささか脱線して、教室の形や経費の話になったが、今回は教員の話に絞りたい。改善速度が遅い原因を、教員に焦点化して、以下羅列していこう。

教員がレクチャする以外の授業をした経験がないどころか、そうした授業に出会った経験が大変少なく、イメージがわからないことがある。教員が話し、受講生が聴くというスタイルは、ごく普通で「正常」なものであり、改善が必要な「不正常」なものとは考えない。そこでは、受講生の学ぶ過程は、教員にとって関心事にほとんどならない。教員は専ら情報提供者としての役目を果たせばよく、学びは受講生自身の課題である。それは、明治の帝国大学以来の「伝統」である。日常授業で、教員が学生にかかわる役目があるとすれば、私語など授業進行を妨げる「妨害行為」を注意したり、過度の妨害者を教室から排除することである。授業の欠席遅刻早退は、受講生自身の問題であり、教員が関与する事ではない、と考える。

そのため、教員が授業準備のために作成するのは、レクチャ内容を記した講義ノートであり、授業の進め方、受講生の学ぶ過程にどのように関与するかといったことを記入する、授業ノートを作成することは、例外的なものである。

教員が学生の学習状況の中味にわけいって関心をもつのは、一連の講義の最後に行うレポート提出ないしはテスト実施の際である。端的に言って、教員が期待するものと学生が示した結果との一致具合である。もっとも、自由題でレポートを出させれば、それもわかりにくい。授業効果を読み取りにくいからだ。また、コピペ提出が多いそうだが、そうなると、ますます読み取りにくい。

## 4

ここで、視点を変えて、一つの疑問を提出しよう。レクチャ型授業は、「話」―「聴」という形を取る。教員は、自分自身によるものを含めて関係分野の研究者たちの研究成果をもとに作成した講義ノートを読み上げる、つまり「話す」という形で授業をすすめる。「読む」ことを「話す」ことに転換するわけだ。受講する学生は、教員の「話」を「聴き」、それをノートに「書く」。ここにも、「聴く」から「書く」ことへの転換がある。

つまり、レクチャ型授業は、「読む」―「書く」を、「話す」―「聴く」への転換を原理として持っている。しかし、そのことを自覚してやっている人は稀だ。だったら、最初から「読む」―「書く」の「授業」にしたらどうか、ということになる。

実際、そのようにしている授業がかなり増えている。例をあげよう。

コンピューターのパワーポイントソフトを使って、教室に設置された大型画面に、教師が提供する情報を映し出して、授業をすすめる。その情報をプリントアウトして、学生に配布することもある。学生は、画面を見ながら、教師の説明を聞く。教師の説明は、画面で見せる情報のなかの「強調点」「補足点」などを話すことになる。受講生はノートを取る必要はない。自分の疑問や強調点をメモるぐらいですむ。いまでは、ノートではなくて、パソコンやタブレットに、教師が提示するパワーポイント情報をコピーし、そこに、教師が話して伝える補足情報などを加える。あるいは、自分なりに考えたり感じたりしたことを加える。

ところが、現実のこうしたタイプの授業では、受講生の居眠りが大量発生する。教室照明が消され、適度な静けさが保たれるなど、眠り発生の環境が整うからである。

ズームなどを使用したオンライン授業も、それに類した授業が多いだろう。

実をいうと、私は、パワーポイントを使った授業の経験はないし、ズームを使ったこともないので、これ以上のことは書けない。

もう一つ、異なる形もある。レクチャ型授業ではなくて、演習に多い形だが、事前予習する文献を提示して、受講生全員が既読であることを前提にして、受講生ないしは教師による問題提起・話題提供・感想表明などにに基づき、教師も含めて受講生による討論ないしは共同制作の形を取る例も多い。

実は、授業改革事例で多いのは、この形である。演習や20人以下の「講義」であれば、たいいていの大学教員がイメージできるスタイルである。数十人以上の受講生であれば、問題提起・プレゼンテーション・討論・共同制作のための、受講生編成や道具立て、進行の工夫が大いに求められる。

レクチャ型授業をするにしても、こうした授業改革をするにしても、「読み」―「書き」と「話し」―「聴き」という二つのレベルの過程が、どのようにからみあっているのか、からみあわせるのか、ということについての、意識化が必要である。しかし、この意識化がほとんどされずに、「読み」―「書き」の世界と、「話し」―「聴き」の世界とも、無意識にすすめているのが、実情だろう。

余談になるが、なかなか優れた発言をするが、レポート書きになると、さっぱりダメ、あるいは、レポートはきちんと書けるが、発言をほとんどしない学生をよく見かける。こうした受講生の強み弱みをどう改めていくのかも、教師の指導の重要なひとつだが、それを意識的にしている教員は少ない。

## 5

講義ノートを読み上げたり、あるいはパワーポイントで情報提供をしたりするが、受講生が授業過程でどのような学習をしているのかに関心をほとんど持たない教師にとって、対応に困難を感じることは、私語・居眠り・欠席遅刻といった授業過程を空洞化する事態、つまり、受講生管理にかかわる事項である。

そうした教師は、受講生は積極的姿勢をもって授業に臨むべきであって、授業を空洞化させる行為をしてはならないと考えている。そうした学生は叱責の対象で、場合によって教室から排除する教員もいる。

40～50年前までは、そうした学生は授業に出てこないで、自分で学習するか、別のことに熱中していた。当時の授業では出欠をとらないのが普通だった。ほとんど欠席しても、レポートを出しさえすれば、単位取得できた授業も多い。当時、講義の出席率は30～50%というのが、かなり見られた。第一回目と最終日だけは、教室からあふれるほど受講生が集まるという珍現象は、珍しくもなかった。

近年では、事情が大きく変化した。学生の出席率は、80～100%になっている。出欠はきちんととらなくてはならないと教員には指示される。そうすると、授業進行・授業管理に差しさわりを生み出す学生が顕在化し、かつ、出席していても、授業内容にほとんどついていけない（いけない）学生が増加する。

そうした学生を「困難を抱えた学生」と呼んでみよう。困難を抱えた学生に向き合わず、「授業についていけない」といって、学生の方を切り捨てることが多く、そうした学生に適合していない大学授業の問題性を解明し、授業改善することをしない教員は多い。授業の問題性の一つは、受講生数の過剰な多さにある。そのことを改善しようとする教員は多くない。50人のクラスを二つやるよりは、一つにまとめて100人でやる方がいい、と公言する学長がかつて存在した。今でもいるかもしれないが。なかには、受講生が多いほど、学生に買わせる教科書がたくさん売れていい、とまでいう教員もいた。100人も学生の学習に対応する力量を教員がもっているわけではなく、対応しようとする姿勢さえもっていないのだ。

困難を抱えた学生への対処を工夫し実行する以前に、「出席が義務なのに出てこない」などと、学生へのグチが、そうした教員には多い。

## 6

前回書いたタイプの教員に多いのは、従来型の「エリート」タイプで、従順な学生を相手にして授業することを当然とする人であろう。そうした学生は、教育系や看護系にはすごく多い。だから、授業は「やりやすい」。対照的に、経済系や体育系には、授業で必死に頑張る学生は少ない。かれらの多くは、授業外の場で頑張る世界を持っている。そうした多様な学生が、実際にはたくさん存在する。

そうした学生に分け入って、かれらが積極的に授業に関わり合ってくるような工夫が、教員には求められる。大学の定員割れが、半数の大学で生じるような時代に、授業に真っ正直に向き合ってくる学生が多数を占める状況は少なくなっている。生活習慣上、教室に来て出席しているだけ、という学生さえ多い。親に、「せめて大学には行ってほしい」と



懇請されて、入学してくる学生さえいる。

そのため、大学教員として勤めを果たすためには、そうした学生への誠実で丁寧な対応が不可欠である。とはいえ、対応の仕方を教えてくれる人は滅多にいない。かなり以前に、ある大学で「教育アドバイザー」として、授業にかかわるアドバイスを続けたことがある。私への相談のほとんどは、ここまで述べてきたような困難を抱えた学生への対応についてだった。たとえば、「ゼミの出席率が半数で、困っている。一応は連絡してみたが、うまくいかないの、いい知恵はないか」といったものである。

私自身もそういう学生が受講生の多数を占めるクラスを担当し、散々苦労しながら、多様な試行錯誤的な工夫を重ねながら「修行」を積み重ね、有効な手立てを見つけ作り出してきた。ここで、大学入学早々の必修科目で、問題を発見し、それを研究的に探求していく方法を身につけさせる科目を担当した際のことを書こう。

こうした科目は、1990年代後半から広がり始めたが、多くの教員は、「〇〇新書を読んで考える」という形をとった。新書と言っても、新入生には歯が立たない本格的な専門書である。多くの新入生は、そうしたシラバスを示した教員の授業を希望しないので、受講数が数名以下になってしまい、それを嘆く教員が多かった。その教員は、そういう入門書を読んで研究の世界に入ってきたのだろうが、エリート中のエリートが受講する一年生科目でのやり方だろう。

これから書く私の経験例の話に戻ろう。私の苦難はスタート時点から始まる。苦難と書いたが、私にとっては、どんな学生と出会うのか、その出会いがどんな物語をつくっていくのか、興味津々で迎えたと言った方が正確だろう。

というのは、受講生は、1年の時の受講で「不可」をもらった2年生ばかりである。つまり1年時の担当教員が「手に負えなかった」再履修学生を集めたクラスだ。必修科目なので、このままだと、留年、休学、退学になる可能性をはらんでいる。もし、それらの学生が大学在学をあきらめるなら、授業料収入〇〇〇万円予定が消えて、大学経営上の深刻な事態を引き起こすから、大学経営者にとって重大な問題なのだ。そんな学生たちを「引き留めて」卒業まで学生生活を継続できるようにする「使命」を感じる担当であった。

次回、私がしたいいくつかの例を示そう。

## 7

前回書いた授業での私のやり方の基本は、受講生とともに「受講生自身が関心をもつことのなかに、深めたい問題を発見し、いっしょに調べていく楽しい授業」ということにある。

「苦難」は、スタート時点から始まる。登録学生は、20名余りだが、最初の授業から出席率は20%余りだ。時間通りに着席している学生は、2~3人。少しずつ入ってきて、終了時点では、10人を超す。ここで「欠席するな。遅刻するな。」といっても始まらない。時間通りにきている学生と、楽しく話しながら始めていく。昨年の担当教員のグチを沢山聞かされる。私は、相槌を打ちながら、いろいろと聞いていく。その合間に、今回の授業は、どんな風にしたかったのか、の話題を入れていく。

40分ぐらい遅れてきた学生に、「社長出勤だ。貫禄十分で、すごいね。もしよかったら、次回は、課長出勤になって、平社員の気持ちに少しだけ近づいてみたら」と声をかける。終了間際に着いた学生には、「豪快な会長出勤だね。そんな雰囲気を持っていて、すごいな。次回は、どんな出勤になるかな」などと楽しく冗談を語る。

授業という、かしまった場で話す経験に乏しい学生たちだが、ボツボツと語る言葉は、結構面白い。これまでの学

校生活での色々な体験を聞く。そして、自慢話なども聞く。実に多様なタイプの学生たちだ。

私のこんなやり方に、学生たちは、「変な教師」だけど「面白そう」と感じてくれたのか、お互いに「素性」が分かってくる。いろんなクラスで不可をとったものたちの寄せ集めだから、お互いに顔見知りの者はほほいさない。学部学科も多様だ。授業を通してのつながりをもつ学生は少ないが、部活仲間はいそうだ。「社長」「会長」は、豪快な姿で入室し来るものだから、私がかってに命名したものだ。かれらは、叱られると思っていたのが、「社長」「会長」と呼ばれて持ち上げられたから、不思議そうな表情のなかに、楽しそうな雰囲気をもって、いろいろと語る。といっても、次回からも、「時々出席」で、「遅刻は相変わらず」。でも、つながりができたので、最後まで受講し続ける。

受講生とともに、授業でやること、進め方の相談をし、彼らから出てくるアイデアを生かしていくという形ですすめていく。無論、レクチャ風ではなく、雑談風にだ。そこで、関心のあること、やりたいことが、一人一人浮かび上がってくる。

こんな会話をしていると、少しずつだが、出席率を維持し、時には上昇する。「出勤時間」が早まることもある。時には、定時に誰も来ずに、私一人で、終了時間に待ち続けたこともあるが、結局出席ゼロの時もあった。でも最後の授業時には、ある程度の出席者が出てくる。

こんな受講生には、悩みを抱えている例がある。そこで、学生相談室に行き、受講生名簿を見せて、数名みつけた該当者の悩み事を担当者から聞く。この年齢時期には、うつ病など、色々と悩み事をもったり、家族関係の悩みをもったりする学生がいるのだ。いろいろとネットワークを活用することも有効だ。

こうした対応には、中学高校の不登校の子どもたちを相手にした取り組みが参考になる。

## 8

前回の続きで、「苦難を抱える」学生たちとつきあった私の授業例である。

学生たちのアイデアを生かして、毎回いろいろな取組みをしていく。

- ・大学周辺で、面白いものを発見し、撮影して教室で見せあう。
- ・大学の校門の周りは雑草も生え殺風景だから、花を植える。その日は、皆で草を抜き、花を植えたが、人通りが多い所で、少々目立った。
- ・アルバイトで、ユニークなたこ焼きを作ることをしていた学生が中心になって、たこ焼きパーティー

これらのなかで、受講生相互の関係作りが進むとともに、問題発見の機会を得て、調査発表へとつながっていく。最終的には、一人一人が調査したことを発表することになっていたが、そのテーマ発見に苦勞する学生も多い。でも、いろいろなアイデアを出し合うなかで、イメージが膨らんで、自分の身近なところで、テーマを見つけていく。「自分が住む村の自慢」を調べて発表、などといった具合だ。

テーマを見つけれなくて困っていたある学生は、彼が持っているカバンがユニークで私に関心を持ったものだから、そのかばんについて調べて発表した。

以上書いてきた事例を大学教師たちに話すと、驚く人が多い。彼らの持つ授業イメージにはないからだろう。また学生と私との付き合い方に驚く人も多い。その会話を見て、学生に対して「先生にため口を使わないように」と注意する人もいる。学生たちは、高校時代までを含めて、そんな注意を受けて、教師嫌い、学校嫌いになっただろうなと推測す

る。教師と学生間の距離を縮めて、共同作業を始めて、学生を研究の世界に導くには、「ため口」が有効だと私は思う。

ここで登場する学生は、全く「要領の悪い」学生だが、学生のなかには、面従腹背とまでいわなくても、授業・教員に「要領よく」付き合っているものが結構いる。と同時に、「要領が悪い」ために、精神的に過剰な不安を抱えている学生も多いのだ。大学入門科目は、こうした「要領の悪い」学生も含めて、知的探求の世界、共同学習探求の世界の面白さを体験させることが課題なのだ。

こうした学生との付き合い方がわからないまま、学生たちを「ついてこれない」学生に仕立て上げているのは、教員自身ではなかろうか。100年前なら、「自分でやりなさい。」と放置されて、「自分がやりたいから頑張ってきた」というエリート主義の世界であった。現在でも、そうした雰囲気をもったエリート大学出身者が大学教員には多い。

しかし、今では、同世代の50%が大学に通う時代で、しっかりした考えを持って入学してくる学生がどれほどいるのだろうか。学生が大学に合わせるのではなく、大学が学生に合わせる必要がある例が多いのだ。それはレベルを落とすという問題ではない。大学と学生とが出会い、共同作業をしていくなかで、ともに知的探求を深め高め合う関係を築けるかどうか問われる時代なのだ。

2022年05月10日

## 年4回の沖リハ授業スタート

5月の金曜日の4回は、沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科一年生の授業。

6日が最初だったが、授業好きな私にとっては、幸せ時間だ。「対人援助の基礎」を学ぶということで、人間関係ワークショップを、ここ10年続けている。この学科創設以来授業をもっているのが、今年が18回目。それでも、毎年のメンバーの個性があるので、それに対応してアレンジして、楽しくやっている。

以前は社会人が多かったが、いまでは数人足らずで、ほとんどが高校卒業仕立ての若々しい雰囲気。男子学生は、以前から数名だが、今年は特に少なく3名。それでも元気よくやっている。

全体として、楽しく「ゲーム」めいた活動に、キャーキャーと活発だし、真正面から取り組む姿勢に勢いを感じる。

現在の私の周辺には、高卒で専門学校を経て就職する若者が多く、大学進学者は多くない。それは沖縄の全体傾向でもあろう。専門学校で近年多いのは、医療福祉系だ。この学校もそうで、専門学校教員には、卒業生、以前の私の授業の受講生も多い。卒業後も、つながりのある学生も多い。先日も我が家を訪問してくださった。

専門学校を経て職業人生に就く人が多いのに、教育関係者の関心は、小中高大というコースに焦点化されたままなのは残念だ。

専門学校経由の人生創造をする方々が、沖縄の未来の一角を担っていく現実がある。そして、かれらが、どんな人生と沖縄を創造していくのか、楽しみだ。



写真は、授業の最後に受講生が付箋紙に書いた、本日の授業について「漢字一文字で書く」の一覧(一部)だ。これをもとに、振り返りをする。

2022年05月28日

### クライアントとの信頼感あふれるつながりをつくっていきそうな素晴らしい学生たち

沖リハ言語聴覚学科一年生の授業の私の担当分の4回が終了した。すばらしい学生たちの充実ぶりに満足しまくっていた。

かなりたくさん知識を習得しなくてはならないことに負けそうになることが多いなか、今年の学生は、明るく楽しく行動的な雰囲気が充満して、すらすら進む。そのため予定より時間短縮してしまい、振り返りの時間に余裕ができて、楽しいユンタクがすすむ。

クライアントとの付き合いが上手くいきそうである。毎年「人見知り」で、話しかける、聞き取る、会話をすすめることに難渋することから始まることが多いが、クラスの雰囲気に後押しされて、緊張気味の学生も、どんどんと進んでいく。

言葉だけでなく、ボディランゲージを使い、雰囲気作りもうまく、クライアントが楽しくノッていきそうである。

現代の若者の自己肯定感が低いことが、よく話題になるが、逆に回を重ねるごとに、自信を高めていく。

4回目には、難題を抱えるクライアントを支えつつ説得する活動をしたが、こうした体験を何年も重ねたと感じるほど、充実した説得を全員がしていた。

その後に、自分の説得のいい点を確認発表してもらったが、表情・まなざし・手・「無理強いをしない」・実に多様な形が登場してきた。ガンバリズムではない所が良い。

近年の若者の大きな変化なのか、この学年がとくにそうなのか、その点はわからないが、大きな期待が持てそうに感じる。

充実しているので、私にも疲れはあるが、入り組んだ疲れではなく、年相応のものだ。この授業は、今年で終わりか、さらに続けられるか、まだわからないが、授業は楽しいし、若者と接することは、私にとっても、大いにプラスだ。

2022年01月14日

### 新著「沖縄の子ども」届く

7日に、できあがった新著がついに到着した。年末年始があつて、少し遅れはしたが、アマゾンから届く。想定より立派な本になっていてホッとした。

実は、この本は、通常の出版社で作成発刊し、書店のルートにのって販売されるものではない。著者自身がすべて作成し、販売するアマゾンにつないでくれる「ネクパブ・オーサーズプレス」社の世話でつくったものだ。だから、自費出版というよりは、自作出版というものだ。無論、版作成や表紙作成にプロの手を借りれば費用はかかるが、今回すべて私自身でやったので、費用はかからない。無論、私自身の「人件費」がでかい？が、限りなくゼロに近づけた。

上手下手を含めて、私の仕事具合がそのまま出来上がった本に反映している。出版社やアマゾンがつけたバーコード以外はすべて私が作成したものだ。

そして、注文を受けると、一冊ずつ印刷して発送するオンデマンド・システムだから、「在庫ゼロ」で、通常のように2000部とか印刷して保管しておくわけではないから、出版社・アマゾン・著者に負担はない。

本の価格は、アマゾン（印刷代発送代を含む）の取り分、出版社の取り分に加えて、著者の取り分を著者自身が設定して合算し決める。今回は、設定された著者取り分の下限に近い額にしたので、1500円プラス税150円ということになった。通常の出版社に依頼しての出版だとしたら、3000円前後になりそうなのが、かなり抑えられたわけだ。

こんなシステムがあることを、つい数か月前に知り、挑戦したというわけだ。初体験なので、結構手間取り、時間がかかったが、こうして出来上がってみると、かなりの達成感がある。次の出版をどうするかは、その時にならないとわからない。

購入の仕方は、アマゾンから注文を出せば、届く。次のアドレスをクリックしてみてください。

<https://www.amazon.co.jp/gp/product/B09NRBSX2T>

早速多くの方が注文してくださって、出版社の新刊本のなかで第4位にランクされたとのことだ。ありがとうございます。



## 「習う」と「教える」連載

2021年06月25日

### ナラースンの展開と教育改革 「習う」と「教える」連載5最終回

前回6月20日記事で述べたように、Bによる教育の動向が広く浮上してきている。たとえば、ワークショップ・協同創造としての教育が、大きな関心をもたれ、学校外の多くの企画で多用され、それが主流になっている分野さえみられるようになった。それだけに、Aが濃厚に染み付いている学校および教員の体質のなかで、ワークショップをはじめとするBの実践がいまだに困難な課題になっていることが目立つ。

といっても、学校の中に潜在してきたBの流れだが、それを願う気持ちは強く存在してきた。たとえば、特別支援学校・学級の子どもたちにかかわる実践になかでは、Aではやっていけず、B型の試行錯誤がかなり長く続いてきた。A的要素の強い学力テストから、かれらはしばしば外されてきたが、そのことにどう対応したらよいのだろうか、という問いかけも続いてきたはずだ。そうした子どもたちに、学力をどのようにしてつけるかという課題に正面から取り組むなら、全国学力テストのようなありようの方こそ、問われなければならないだろう。そのように外された子どもたちを前進させる教育をいかに創造していくかに、学校教育は強く問われる。

こうしたなかで学力テストは、Aの測定であるというありようから卒業しなくてはならない。そして、AからBへの転換がはからなければならない。それは、「教育」「教える」と「ナラースン」とをいかにからませるかという課題の創造的探索となろう。

Bの追求創造は、子どもの自己教育、子ども集団の自己教育と深く結びつく。最近、話題になることが多い校則問題は、まさにAの流れであり、子ども集団が自ら作ったものとは縁遠い。校則だけでなく、学校そのものを、子どもたち自身や保護者自身が作り上げるものとして改革していく方向を時代の流れとして築き上げていきたい。そして、学校教員が、「上」からの指示のもとついで「歯車」のように仕事をする感覚が強い状況を変え、自ら学校を作り上げているという気持ちをもって、実際に学校創造の営みにかかわるようにしていきたい。

同様に、部活動、とくにその「指導」のありようが、さまざまな問題を引き起こしているが、部活動は、元来、子どもたち自身が築き上げるものであるという性質は、どこかに消え去っている。子どもたちの希望者が集まって、自由に設立廃止し、加入退会するものであるが、そうした事例を見ることは稀だ。

たとえば、校区のことや沖縄のことを調べ研究し提案するような部活、いくつものスポーツ種目を楽しむ部活、自分たちで作曲し演奏する音楽部活、心安らぐ居場所となって、共同でやりたくなる何かが出てくれば、それに取り組む「なんでもクラブ」などがあってもよいだろう。日本の部活には、世界的にみても不思議な慣習が多いが、子どもたちの手でそれを変えていけるようなものにしていきたい。

南城市「こどものまち」宣言は、市内の子どもたちから集めた1100余りの言葉をもとに、シール貼りなどの形で大規模投票などを経て、子どもたち自身が文章化したものだ。大人が作って、子どもたちに提供したものではない。子どもたちが、自分たちでつくとすれば、すごいものを作ることの典型的事例だ。

「子どもたちの営みを促進すれば、子どもたちは素晴らしいものを作り上げる」ことを、大人たちが確信してBをおしすすめていけば、素晴らしいB、「ナライン」が膨らみ、それと結びついた教育が作られていくことだろう。

2021年06月20日

## 明治期の学校創設にともなう「教育」≡「教化」の登場 「習う」と「教える」連載4

前回見てきたことを踏まえて考えると、「教える」「教育」には、次の二つの傾向が含まれていることに気付かされる。

A 「伝え、強制的に枠組に入れ込み、習わせる」という教育 「教え込む」「教化」強制力としての教育

関連する言葉をならべてみよう。 否定する けなす 強制する 強いる 取り締まる 詰め込む

B 「本人たちに『習いたい』という意欲を育み、大人（親など）がやっていることを真似る（習う 学ぶ）ことをすすめていく。」習いの促進としての教育 「ナラースン」はこれに近い。

関連する言葉。励ます 誘う 促す 肯定する ほめる つなぐ 発見する 出会わせる

このAとBの二つの間には距離があり、たやすく結合統一できるものではなく、両者の間に揺れ・矛盾が、日常的に生まれてくる。

明治の学校制度創設以来、教師による教育は、Aとして展開されてきたため、現在でもその傾向を強く持っている。そして、Aには軍隊が深くかかわったことを忘れてはならない。現在の学校にも軍隊式教育の痕跡が多く見られる。学校行事等にそうしたものが多い。また、学校における授業のなかで、特に中高校大学で、講義式が多用というか、むしろそれが圧倒的存在になってきたことにも注目する必要がある。それは典型的なAの教育である。しかもそのことを自覚していない教員がほとんどである。無論、研究成果に基づく情報を提示して、生徒が考える材料を提示するという姿勢の授業もあるにはあるが、1%もあればいいところだろう。

それに対して、親たちの教育は、旧来のナラースンの流れのなかに存在してきたが、Aの「勢力拡大」のなかで、AとBとのからみ合いの中で営まれ、両者の間の揺れ・矛盾が強く存在してきた。といっても、実際にはAで彩られている。

こうした教育動向は、明治以降の政府による住民統制（トップダウン）と、住民の自主的動き（ボトムアップ）とのからみあいと似ている。実際、それと並行して学校教育が進んできたといってもよいかもしれない。

近年、Bの流れにかかわる創造性の教育が強調され、世界的な動向となる中で、Aの流れのなかの唯一正解型の教育に対する改革が、政府にも強いられる中で、今後どうなっていくのだろうか。全国学力テストのように、Aそのものであるものさえ、Bの色合いをつける変化が生まれてきている。

また、さまざまなオールタナティブなありようを追求する動向では、Bが大きな軸になっている。それは、「ナラースン」を現代の状況のなかで発展させようとする試みであるといってもよさそうだ。

以上、ウチナーグチにかかわって述べてきたが、私はウチナーグチのネイティブ使用者では全くないから、誤り勘違いなどが多分に含まれていよう。そのあたりに詳しい人からのコメントを期待したい。

2021年06月14日

## ウチナーグチは、「教える」「教育」に相当する言葉をつくらなかった？ 「習う」と「教える」連載3

前回述べたような「ナライン」「ナラスン」を軸にする使用法に大変化が生じるのは、明治期の政府による学校創設が契機だったと推理される。

ということは、それ以前は、「教える」「教育」よりも「習う」「学習」が中心にあったということであろう。そのことが、ウチナーグチの世界では今日まで続いてきている。そのため、「教育」論、「教育」観も熟したものとはならず、「学習」論、「学習」観が前提となって展開してきたと言えよう。

そして、明治期以降、「教育」「教える」という言葉が、日本語として沖縄でも使われるようになるが、それをウチナーグチで表現することがなされないまま、現在に至っているといえよう。それにはもう一つの事情を見ておく必要がある。「教育」を展開した中心場である学校では、ウチナーグチの使用を抑圧する方針であったことである。

日本語における「教える」「教育」をめぐる動向も、実は類似の傾向を示している。詳しくは次を参照されたい。  
中内敏夫著作集IV『教育の民衆心性』藤原書店1998年所収の「「教」と「学」という文字の歴史」

明治期における「教育」「教える」の登場は、ナラスン（習わせる）と教育の営みとの間にある違いが作り出す距離、いいかえると飛躍を生み出したが、それを、いまだに引きずっているように思われる。

そのことの背景には、学校がウチナーグチを抑え込んできたことに加え、明治期の学校で展開された「教える」「教育」が、実質的に「教え込む」「教化」であったことがある。「教え込む」「教化」は、教育者が知識技能を子どもに提供すると同時に、子どもを管理統制しつつ、それらの知識技能を「詰め込む」ないしは「叩き込む」形で、「反復練習」として展開された。

その過程では、子どもたちが知的探求および知的創造をするという性格が限りなく縮小された。ユシーンやウシーは、「教育」「教える」よりも、「教え込む」「教化」に近い意味合いをもっていた。他方、「ナライン」は、子ども自身の主体的な性格が強く、自主的な知的探求および知的創造にもつながる可能性をもっていた。

2021年06月09日

## 「教える」という言葉は昔から使われていたわけではない 「習う」と「教える」連載2

『「教える」という言葉は、昔から使われていた長い歴史を持つ言葉だ』という思い違いというか、思い込みが広くみられるようだ。実は、「教育」「教える」という言葉はかなり新しい言葉である。

沖縄語（ウチナーグチ）でみてみよう。「教える」「教え」「教育」に対応する言葉は、ウチナーグチでは何だろうか。内間直人・野原三義編著『沖縄語辞典』（研究社2006年）で調べてみる。

まず、日本語をウチナーグチでどうかを示す和沖索引から見よう。

教える	ナラスン／ユシーン
教え	ウシー
教え方	ウシーカタ ウシーヨー
教育	該当するものなし
学ぶ	ナライン



習う ナライン

逆に、ウチナーグチでの関連語を並べてみよう。

ナラースン 教える

ナライン 習う 学ぶ

ナラーシ 教育 しつけ

ユシーン 忠告する 教える

ユシグトゥ 教訓 忠告

ウシー 教え 教育

これらの特徴として、「ナラースン」が基本にあることがわかる。ユシーンやウシーがあるが、「教訓」「教え」といったニュアンスが強く、「教える」「教育」とは微妙に異なる。

「ナラースン」は、子どもないしは被教育者が、自身の営みである「ナライン」をもとにする表現である。教える側に主語を移す場合には、「ナライン」に「させる」という意味を付け加えて「ナラースン」という表現を使うことになる。

だから、「教育」「教える」に相当する言葉が、ウチナーグチには存在していないともいえそうだ。

2021年06月04日

## 子どもの教育についての親の権利と義務 「習う」と「教える」連載1

新しい連載に入るが、その前に前回までの二つの「教育の思い違い」連載の補足をしておきたい。

「子どもの学業・品行にかかわっては親が一番の責任がある」ということがよく聞かれる。あるいは、「子どもの生活・教育にかかわる責任だけでなく権利も、なによりも親にある」ということもよく聞かれる。

たとえば、子どもが地域や学校など家庭外で、他の子どもに危害を加えたり、物件を破損したりした場合、保護者である親に責任、たとえば賠償責任があるとして、対応が求められる。あるいは、子どもをどの学校に通わせるか、お稽古事をさせるかどうか、などを決めるのは親の権利だということを聞く。たとえば、幼児期に楽器の早期教育をさせることを親が決めても問題にならない。微妙なこととして、家族旅行に出かけるので、子どもが学校をお休みにする、といったことの是非がある。

このように、子どもの教育には、誰よりも親に責任と権利があるという考え方が、今日ではごく普通に聞かれる。だが、子どもの教育にかかわっては、学校だけでなくいろいろな人がかかわっている。

先の連載では、子ども自身の自己教育をまずあげたが、当事者としての子ども自身の考えが尊重されなくてはならないことは、「子どもの権利条約」以降、ようやく広く認められるようになった。加えて、子ども自身がかかわる集団があり、子どもにかかわる多様な大人たちがいる。そうした多様ななかかわりのなかで子どもは存在している。したがってたとえ親の権利が尊重されるとはいえ、親が単独でないしは優先的に決定する権利があるといえるかどうかには疑問符がつく。

また、子ども時期には、保護者としての親の責任が問われることが多いが、成人したとみなされる20歳ないしは18歳以後は、どうであろうか。保護者の責任・権利は、どこまで認められるのであろうか。これらは法的面だけでなく、実践面として、試行錯誤と議論をより深めていく必要があろう。

もう一つ補足したいことだが、「家庭教育の主目的は、子どもが学校で成功を収めるようにサポートすることだ」という観念が強力に存在し、学校の宿題の「まるつけ」を家族の義務として学校が要求することが広く行われているが、疑問視する声も多い。とはいえ、多くの家庭はそれに従う。その結果、家庭教育とはそういうものだという観念が広がっている。そのなかで、家事にかかわる教育などは消滅していき、家庭から「お手伝い」「家事労働」が消滅しているのをどう考えたらいいのだろうか。

かつての「家庭教育」は、「生産・生活にかかわる教育」が中心であったが、現在では学校教育の「下請け」化している現状をどう考えたらいいのだろうか。

このあたりも議論を深めていきたい。

前回の連載では、事実上の教育活動している人が、教えていると自覚していないことが広くみられることを話題にしてきた。そして、親をはじめとする事実上の教育者が、みずからを教育者として自覚しつつ実践していくことを期待した。

次回から、それらと関係するが、「教える」ことを自覚してすすめることにかかわって、言葉の問題に焦点をあてて、深めていきたい。

## 「教育での思い違い」連載

2021年05月29日

### 実践検討会 実践交流 (続)「教育での思い違い」連載6

実践交流、実践検討、実践研究会は、反省・再帰のために有効な二つ目のアプローチである。それは、実践する当事者だけでなく、第三者の眼で見つめてもらうことである。学校で行われる授業公開・研究授業もそうした場である。実践記録執筆と検討も含めて、実践検討を行うことは海外では多くなく、日本の学校実践の財産でもある。

そうした場で有効なもう一つとして、ロールプレイで実践場面を再現し、別のやり方を創造発見していくことがある。親子関係について、反省再帰し、交流検討し合ううえでも有効だ。例えば、「抱っこ」を演じて見せ合う。見せ合うと、親子によって、バラエティに富んでいることに気づきやすい。親子の見つめ合いシーンでもいいし、「イナイイナイバー」シーンでもよい。他者のやり方を見ることで、自分の「抱っこ」などをより豊かなものにしていける。

孤立的閉鎖的になっているといわれる子育てを、開かれたものにしていくことは重要だ。育児書や、自分が育てられてきた経験だけをもとにするだけでなく、このように育児を公開し交流し合う機会を増やしたい。その点では、保育園や子育てカフェのような場が、重要なきっかけを作るだろう。

そうしたことが、かつて広く行われていた、一組の親子だけに閉じない事実上の共同の子育て、あるいは名付け親など、複数の親をたててきたことを現代で再創造することになる。

こうした営みをとおして、反省・再帰型の教育を創造していきたい。上意下達スタイルの統治型教育にかかわってきた歴史が長いだけでなく、現在もまた、そうした傾向が濃厚だから、なおのこと、これらの営みを大切にしたい。今回で、(続)「教育での思い違い」連載を閉じる。

2021年05月24日

### 実践記録を書く (続)「教育での思い違い」連載5

前回書いた反省・再帰のために有効なアプローチの一つとして、自分の実践を文章化する、つまり実践記録にすることがある。それは、録音録画されるような「事実」に加えて、教育者として、どのような思い・狙いと実践構図をもって実践したのかを文章にする。録音録画の裏に隠れている「事実」を、自分自身の振り返りの中で発見確認していくともいえよう。実践記録は、対象としている子ども・子ども集団をどのように捉え分析し、実践の構想を立てたのかを含むが、といっても、子どもの記録というよりも<教育者>自身の記録なのである。

40年前に、私は「教育実践の自己展開サイクル」というものを提案し、繰り返し語ってきた。「子どもの事実→その分析→指導方針の作成→実践→子どもの事実・・・このサイクルのくりかえし」というものだ。このサイクルは、たとえば子どもとの10分間のやりとりの実践のなかには、5～20回ほど含まれる。だから15分ほどの実践であれば、文字にすれば1000～2000字ほどの実践記録になる。

この考え方をもとに、<教育者>が実践記録を書くワークショップを私は数限りなく行ってきた。学校教師だけでな

く、学童クラブ支援員や保育士対象にも、実践記録を書くワークショップを繰り返し行ってきた。

これらをとおして、無意識に行っていた面を色濃くもっていた自分の実践を意識化していく。つまり反省（再帰）していく。この実践サイクルを記述するだけで、自分の実践のどこに飛躍・空白があるか、無意識でしていたことを発見意識化する。そしてそのサイクルに含まれる肯定的な面あるいは改善を要する面を発見する。

実践記録を書くこうした過程も、できれば一人ではなく、何人かといっしょに書いていきたい。たとえば4人といっしょに、各々が自分の記録を書きながら、他の人の記録執筆を見合いながら、お互いに、「この場面では、こんなことをしたのではないか」と発見指摘しあうのである。たいていは、執筆している記録をリレー式に回していくなかで、グループの他のメンバーが推理にもとづいて加筆していく形をとる。異なる眼で見ると、当人が気づかないことを指摘しやすい。すると、記録はさらに広がり深まる。その過程は、さらに自分の実践、他者の実践の、それまで気付かなかった肯定的な点、今後さらに進化発展させたい面を発見しあうことにつながっていく。無論、その過程でおしゃべり、話し合いも広がっていく。

こうすると、共同で実践記録を書く機会が、実践交流、実践検討、実践研究の会へと発展していく。

2021年05月19日

#### 自分のしている教育活動を「反省」（再帰）的に行う事 （続）「教育での思い違い」連載4

前回までは大きな枠組について述べてきた。しかし現実には「教育する人」が、大規模なシステムの末端現場での「歯車」のようにして、システムの代理人として子どもにかかわる事例があまりに多い。システムの「上部」が作成したテキストやマニュアルを使用し、テキスト内容をマニュアルの指示のままに「教える」ものである。子どもをきちんと管理しつつ、教育内容を「わかりやすく」伝え、その内容を子どもが記憶習熟し、その出来具合をテストでチェックする、という広く見られる型もそうである。

そこでは、子どもたちが、そのテキスト通りマニュアル通りに動くようにするのが教育だ、という思い違いがある。それは、事実上の強制ないしは監督管理である。実は、学校教員にもそういうものがはびこっている。

子どもにかかわる多様な人々が、強制者ないしは監督管理者ではなく＜教育者＞であるためには、「上」が指示するテキスト・マニュアルに適合しているかどうかよりも、自分の教育活動を自分自身が日常的に反省（再帰）して点検し、改善を図っていくことが欠かせない。

点検改善のための準備手段として、調査測定がある。多様なテストの多くもその目的でなされているはずである。子どもに対して行う学力テストも、もともとそうした性格をもって設計実施されたものが多い。それは、何よりも教育する過程や方法を点検改善することを目的とする。

ところが、実際には大半のテストが、子どもの学習を調査することを主目的として行われている。しかも、頻繁に行われている。欧米と比べると、比較不能なほど大量の日本のテストである。テストを行うごとに「教える」側のありようを点検改善をしている話は耳にしない。結局は、子どもたちの学習を促進する、ないしは追い立てるためのテストになり替わっている。ここにも大きな思い違いがあるのだ。

このテストは、ほとんどが点数化されている。それに対して、実践の改善には数値という量的測定よりも、実践の質を問うものである必要がある。

そのためには、まずは実践の姿をつかむ必要がある。日常的には、「振り返り」という形で行われる。「振り返って」、次の実践を改善するようにするのである。それは反省とか「再帰」（ふり帰り）とか言われる。つまり、「教える人」自身も自己教育を基本とするのだ。

反省や再帰の手段としては、日常的には「思い起こす」という形になるが、時々、他の色々な手段を使う。まずは録音録画して、それを視聴しながら振り返る。私自身も、ほぼ50年前の教師一年生の時に、自分の授業を録音して、あまりにもひどい授業に啞然としたことが、実践改善のスタートのきっかけとなった。その他にも、いろいろなアプローチがあるが、次回二つ紹介しよう。

2021年05月15日

### 教育している意識がない「教育する人」が多い (続)「教育での思い違い」連載3

教育をする人自身が「教育をしている」という意識を持たない例が広く見られる。「生活が教育している」とか「仕事・活動」や「つきあい」という体験自体が教育になっている——それが自己教育力の発揮でもある——という感覚でとらえていることがほとんどである。子どもたちがそれらの体験をする過程に、自分がかかわっているという自覚が「教育する人」の側に薄いのである。教育していることを自覚して進めているのは、学校教育にかかわる教師たちに限定されがちである。

学校外でも子どもにかかわる仕事をしている人、幼稚園教員、保育園保育士、児童館職員、学童クラブ支援員なども事実上の教育活動を担っている。地域住民も子どもにかかわっていれば、教育的役割を果たしているといえる。

わけても巨大なのは、子育てをしている親であり、親は当然のことながら<教育者>なのである。しかし、これらの人々は、教育者として自覚していることは多くない。なかには、そうした態勢と決意なしに親になってしまい、親役割を引き受けようとししない事例も出現している。

子育て放棄とまでいなくても、「教育は素人だから、プロのようににはできない」と居直り、<教育者>となることを意識的に追求しない事例も多い。

ところで、自分の親が自分に対して行ったやり方を、自分の子どもにそのまま使うこともかなり多い。「言うことをきかない」といって叩かれた体験を持つ人は、同様な状況になった時、自分の子どもに対して叩いてしまうことがよく見られる。その際に、少しでも踏みとどまって、「どうすればよいのか」考えることが求められる。親の世代と自分の世代とでは、時代の違いだけでなく、置かれた状況もかなり違うはずである。似た場面でも、自分自身も子どもも大きく異なる。こんなことをきっかけに考え始めることで、少しずつ<教育者>になっていくのだ。

このように、「教育の担い手の第一は教師だ」、自分自身も含めて「教師以外の関係者は、補助的役割に過ぎない」という思い込み・思い違いをしていることが多いのだ。教育者の中には、学校教員のように、教育を専門業務にしている、いいかえると教育専門家がいますが、彼等だけが教育者であるわけではない。そして、重要なことは、一人で教育しているわけではなく、教育専門家を含めて、多様な人々が教育活動を共同協力して行っていることである。

自己教育は、自分自身の学ぶこと、習うこと、作ること、人とかかわりあうこと、物語や歴史を作ることを意識的に行うことである。そうしたことを前提にして、道案内し励ます子ども集団仲間、そして<教育者>がいることが大きな意味をもつ。とくに成人以前の子ども時代には不可欠だ。

だから、教育者の役割は、子ども本人がどういう自己教育活動をしているのかを位置づけ意味付けつつ、進む方向にかかわっての助言をし、どのようにしたら、当人がやる気を高め、進む道を切り開いていけるかを道案内し激励していくことにあるのだ。「ああせよ、こうせよ」と指示することが、教育活動の大半を占めるような状態を卒業したいものだ。

2021年05月11日

## 自己教育 (続)「教育での思い違い」連載2

重要なことにもかかわらず忘れられがちなことを書いておこう。それはどんな教育にあっても必ず存在し、しかも中心に坐るものである。それは当事者である子ども若者自身が自分に対して行う教育だ。その営みを自己教育と呼んで述べていこう。

自己教育には、個人としての場合と、子ども集団若者集団としての場合とがある。

乳幼児の頃から自己教育は始まるが、年齢進行とともにその比率が高まっていき、重要性が増していく。成人になっていく過程、さらに成人以降は、こうした自己教育が基本にすわり、他者が行う教育機能も、当事者自身が行う自己教育を媒介にして進むとさえいえるかもしれない。

自己教育の視点はきわめて重要であるが、その自覚が希薄で、無意識に行われることが広く見られる。それは日常的で習慣的で持続的な営みだからであろう。また、自分自身でやっていることなので、客観的に見つめにくいこともある。

自己教育にあっては、自分自身を育てるという決意・やる気と、そのための方法を身に付けることがどれだけできているかが、成否に深くかかわるといえよう。それにしても、他の人の協力援助を得ることは不可欠である。

他者の協力援助には、まずは、自分が属する子ども集団若者集団の役割が大きい。学校でいうと、クラスメイト、部活仲間などがある。かつては地域子ども集団若者集団が重要な位置を占めたが、今では限りなく縮小している。

そうした子ども集団若者集団の自己教育力は、数十年以上前までは、かなり注目され重視されていた。しかし、子ども集団若者集団の縮小ないしは崩壊消滅がいわれるようになった数十年前から、注目度が低下してきた。

とはいえ、今日でも多様な形で存在し続けている。部活がその典型であろう。だが、注目されず表には見えない形で、そうした集団が形成され、自己教育力を発揮してきた。ときには、大人からみれば、否定的な形をとる事もあり、抑圧の対象にすらなった。しかし、子どもの世界に深くかかわる教育者は、そうした集団のもつ自己教育力に注目して、集団に関与して教育活動を展開してきた。

また、そうした集団が縮小し希薄になるなかで、つながりをもてずに、孤独に生きる子どもが増加している。だから、子ども集団若者集団を、現代の状況の中でいかに再創造するか、あるいは事実として存在しているが、その肯定的役割が意識されていない集団をいかに意識的に発展させるかが課題となってきた。

こうした子ども自身および子ども集団の自己教育活動を引き出し促進する役割として、「教える人」が位置づく。

子ども・子ども集団の自己教育力を発揮させる営みと、大規模なシステムが設定したものに、子ども・子ども集団を順応させる営みとが並行する現実があるが、時に両者が対抗し合う構図が出現することがある。その対抗の現場に、多くの「教える人」が居合わせ、どうしていくか迷う中で活動をすすめる状況が広く見られる。

2021年05月06日

## 教育にかかわる膨大で多様な担い手 (続)「教育での思い違い」連載1

連載「教育での思い違い」の続編だ。話題を少し変える。教育をする人、教育の担い手、いいかえると教育者の問題に焦点をあてる。

まず「教育をする人」を並列してみよう。

A 親・家族

B 共同体・近隣住民。沖縄農村地域でいうと「シマの教育」とよばれるものの担い手

C 職場の人。農業の場合、大半が親である。個人経営の商工業者の場合、業主あるいは先達。ある程度の規模以上の会社の場合、担当部署・職場の先輩などだが、大規模企業になると、職場のなかに教育組織をもつことがある。他に大規模例として、軍隊における教育組織がある。

D 学校教員

E その他「教育産業」従事者など 塾講師 音楽教室の先生 スポーツ指導者 コンピュータやスマホ操作を教える(アドバイスする)人 発達障がいへの軽減の狙いを含んで何かを「教える」人 糖尿病などの食事療法を「教える人」

ざっとあげると、以上のようになるが、この他にもあろう。実に多種多様な人が「教育」の仕事に従事している。これらには、それらの仕事で生計を立てている人も多い。

教育が、生活生産体験人間関係体験を中心にして、人々の暮らしと密着していた時代は、ABと小規模のCが中心となる。DとEは例外的なものだった。その時代に比べると、現代の子どもたちは、読み書き算を中心にした知識・リテラシーを獲得しなければならないことが増加し、それらの過程にかかわる『教育する人』が増えている。そして、それらの多くが、大規模なシステムとかかわって展開されているのが、ここ百年余りの特徴である。その象徴的存在が学校であり、Dの学校教員である。

近年では、加えて「教育産業」とよばれるほどの規模のシステムが、「子どもがいる所ではどこでも」といってよいほどに見られる。その従事者であるEも「教育する人」である。DEの人々は、大規模システムの「末端」の現場で「歯車」のように働いていることが多い。だが、学校教員以外は、「教育専門家」とか、「教育する人」とかの意識は薄い。学校を含め大規模システムの従事者という色彩が濃い例も多い。

そうした大規模システムの末端のたんなる歯車にとどまらないで、個々の子どもと直接向き合って教えることを自律的創造的に行う人がいる。教える過程をメディア機器が取り仕切ることが中心になる場合でも、初期設定からはじまって進行を調整し、評価を与える自律的創造的に仕事をすすめる人がいることが多い。

2021年05月01日

## 学校史に限定されていた40年前までの沖縄教育史記述 「教育での思い違い」連載6

かつての沖縄教育史記述のほとんどは、以上述べてきたことと同様の傾向を見せていた。1980年代ころまでの、

沖縄教育史の文献にほぼ共通していたのは、一つには、教育史といいながら、学校史であり、二つ目に、統治のための学校教育についての歴史記述であったことである。

学校というと、首里王府時代には、国学、平等学校、村学校、明倫学校、そして筆算稽古所があった。筆算稽古所は、地方役人の子弟のために、役人就職に向けて必要な筆算を稽古する場であった。それ以外は、王府の機関であり、士族子弟のための学校であったが、主目的は、王府役人として必要な文書上の力量を獲得するためのものだった。

明治政府は、これらの学校を基本的に廃止し、小学校・中学校・師範学校などを設立した。それは、沖縄統治の必要にもとづいて、政府の企図通りに運営された。少なくとも1945年まではそうであった。

これらの学校の性格をひと言で述べると、王府(薩摩藩)と政府の統治の必要から作られた学校ということであった。一般庶民の必要・要求にもとづいてつくられたものでなかったのである。

こうした特性があるために、それらの学校について記述する教育史も、統治が、学校分野でいかに展開したかに焦点化したのである。戦後になると、沖縄の近代化が遅れたという視点から、沖縄教育史をとらえるアプローチが広く見られたが、それらも、以上の性格を示していた。

そうしたレベルを超える研究が本格的に始まるのは、1980年代に入る頃からである。無論、森田俊男さんのような先駆的研究が、1960年代70年代に存在していたことを見落としてはならないが。

上記の傾向は、現在でも教育行政関係者による叙述には、学校史中心、ないしは統治者の視点からのものがかなり存在することにあらわれている。戦禍による影響で、資料不足ということもあろうが、統治者の眼で教育史を見る根強さが反映していると言えよう。

統治者の視点は、行政の形で表れることが多いが、行政では、文部科学省系列のものが教育として扱われ、厚生労働省系列のものが福祉として扱われることは、現在でも強力である。そうした「たてわり」「なわばり」型行政が、多くの問題をはらんでいる。それを改め、子どもの事実立ち、子ども目線できりくむための工夫が、近年地方自治レベルで試みはじめられている。タテ割りの克服にとどまらず、子どもにかかわる大人、そして子ども自身がかかわる取り組みが始められ、広げられてきている。

2021年04月25日

## 学校への疑問の広がり 「教育での思い違い」連載5

では、就職先に焦点化されやすい人生進路で、学校を出さえすれば有利な条件を得られるかという、そうは言い切れない現実がある。とくに、子ども自身が自らの人生を自ら選択創造するという希求のうねりが広がっているなかで、学校が、学業成績をもとに決める進路では不本意になると感じる若者は多い。そのこともあってか、就職後数年以内に転職する事例がかなりの率にのぼっている。

その際に重要なのは、学校の進路指導が学業成績に応じて進められて、本人の希望をベースにしない例が多いことである。そして、希望にもとづく進路選択・人生創造の教育がそれほど行われていないことが問題になる。さまざまな職業の紹介はなされているが、職業にかかわって、進路をいかに創造していくかにかかわる意欲と力量を育てる教育がそれほどなされているとは感じられないのである。進路選択にかかわる試行錯誤・創造活動は数年以上かけて進められるが、現実には、学校の最終学年の一年間に焦点化されているし、点数にあわせた選択になかに封じ込められているのだ。

それらの過程は、大量生産システムに設置されたベルトコンベア的な役割をはたすものであり、若者自身が、自分の



道を創造する意欲と力量を育てるものとなっていないのである。

こうしたシステムは、日本全体でいうと、1980年代にピークに達して、それ以後、オールタナティブのありようの模索創造が始まる。しかし、沖縄では、21世紀になってもなお、そのピークをめざす動きが続き、オールタナティブな模索は、微々たるものにとどまる状況にある。

以上のように見てくると、学校教育が担当している部分は、教育全体のなかの半分にも満たないであろう。2~3割以下なのかもしれない。学校をすでに卒業した人にとっては、限りなくゼロに近づいているだろう。成人後どこかの学校に入学して学び始める人は、例外的存在だろう。無論、図書館・カルチャーセンターなど学校外で学ぶ人を含めれば、ある程度の数になる。こうした教育ないしは学習は、社会教育・生涯学習・成人教育と呼ばれるものだが、日本は先進諸国の中では、とても少ない点で目立つ存在であるかもしれない。

このように、人々が思うほどに学校が教育に占める比率は高いとはいえない。むしろ意外に低いといえるかもしれない。高いのは6歳から20歳前後までの期間限定のようだ。

それにしても、その期間、学校にいる時間数日数年数は莫大なものだ。圧倒的存在といえるだろう。「学校など行かなくてもなんとかなる」という言葉は、数十年前までは、少しは有効性をもっていただろうが、いまでは、「学校に行かない」ことは、恐怖さえひきおこし、個人の存在さえ否定してしまうレベルである。

2021年04月20日

## 学校が教育していること 人生創造・進路選択 「教育での思い違い」連載4

話は、さらに「前回から続く」である。

・人生創造や進路選択の教育 このことへの子ども自身だけでなく親たちの学校への期待は大きい。と同時に文教政策だけでなく、経済政策も「人づくり」と称して、人材配分機能を学校に求める歴史を蓄積させてきた。結果として、そのことに学校教育の中心的機能があるという見方さえ生みだしている。テスト結果に表れる学業成績で子どもを序列化し、その序列にもとづいて、進学先就職先を選別していく機能が肥大化しているのが、日本のおおよその現実なのである。それは多くの子ども・親の知る所でもある。

こうしたことが教育といえるのかどうか、むしろ選別あっせん機能ではないかという疑問を持つ人がいるほどである。そうした選別の前提として、子どもに対する学業成績評価、さらには人格評価が広く深く行われている。

子どもたちの将来の人生と進路について、学校わけても学業成績が決定的役割を果たすという体験と認識をもっていない人を、今日ではほぼ見いだせないことが、そのことを示している。

とくに、高度経済成長期、およびその後もしばらく続く経済成長期には、そうした体験と認識が広がり深まる。その時期に、人生計画・進路計画において、学校に依存する発想が一般化したのだ。そのことが、多様であるはずの人生計画・進路計画を画一化硬直化させ、それが結果的に学校をめぐる「病理」現象をうみだすだけでなく体質化していく。

その背後には、教育活動をも、急成長した大規模生産のイメージで語る体質が広がる。そして、教育ならびに学習は、長時間やればやるだけ効果が上がるという、量で測る観念を広げる。そこでは、質を問わないだけでなく、本人のやる気など主体の問題を問わない体質が学校に蔓延する。

だが、こうしたありようへの疑問の声が、近年では広がってきている。以前から存在していた疑問が、学校万能ないしは学校「専制」の過剰な強まりのなかで、広がり始めたといってもよい。

それと並行して、学校には経費がかかり、支出量に比例して教育効果もたらされるという体験と認識の広がりがある。タテマエは、公教育なので平等であるが、塾経費、教材費、通信教育費、さらには私立学校経費など、多くの点で多額の経費が必要であり、一人の子どもにかかる教育経費が、大学卒業までに1000万円を超すことが多くのところで指摘される。子ども自身が、アルバイトでその経費のなかの多くの部分を捻出することが多いのが沖縄の実情だが、それは全国的には例外的ありようなのだ。アルバイトを避けるために奨学金を使うが、それは事実上の教育ローンであることが通例で、その返済で苦渋体験をもっている大人が激増している。

こうした事情の中で、学校とのかかわりに家族の経済事情が深くかかわり、格差が進行している。平等のタテマエとは大きく異なる状況が見られるのだが、家族の所得が低い沖縄は、全般的に困難な状況が見られる。

2021年04月14日

## 学校が教育している比率 自己管理 対人関係 読み書き算 「教育での思い違い」連載3

前回に続いて、教育の諸分野で、学校教育が担っている部分を確認してみよう。

・自己管理にかかわる教育（トイレなど生活習慣、衣食住で自分でやること、身体衛生健康管理、生活リズムの確立、時間管理）。

これらは家族での教育が中心であり、学校で教えられたという人は、それほどいないから、学校でするのはこれまた数%以下だろう。ところで、生活・家事とならんで、近年では「そうしたことを身に付けなくて、学校にくる子どもが多い」と問題になることがある。そこには、家族が本来担当すべきだという考えが前提にある。だが、そういう子どもが増えているといっても、学校が「肩代わり」せざるをえないほどの子どもの数は限られている。

・対人関係（社会での振る舞い方、友人・知人・関係者との付き合い方など）の教育。学校という場で習得することは多いが、学校で意図的に教えられたというよりも、学校生活の中で体験を通して学ぶことが多いのだ。ときには、「いじめ」などの問題行動を学んだという例もあろう。だから、学校で意図的に教えられた比率は、これまた数%だろう。主要には、学校に限らず多様な場面で、多様な人々とつきあう体験を通しての教育が大きな比率を占めるだろう。その点では、地域の大人たちのかかわり、子ども集団自身が果たす役割は大きいといえよう。それは社会資本（人間関係資本）を子どもたちに得させるものであるが、それが低下していることがしばしば指摘されている現代は、模索試行の時代ともいえよう。

・読み書き算の教育。以上述べてきたこととは異なって、これは学校の比重が高く、50%を超すかもしれないが、自習（独習）・自宅学習の比率も案外高いから、学校の比率は思ったほど高くない。60年前の受験高校での私の個人的見聞だが、授業の半数以上は居眠りをして、自宅での自習に精力の大半を使っていたクラスメイトがいた、というところか、そういう生徒の方が多かったほどだった。そういう私も、熱心に参加した授業は、3～4割程度であり、自宅学習や読書に力を入れ、そこで獲得した『学力』の比率が高かった記憶である。

そうしたタイプの受験高校は、沖縄ではレアなのだろう。0校時、7校時の授業が象徴的なように、授業量が「学力」

に比例すると考えて、授業時数に関心を集中させる傾向が強い。

それらの授業は、画一的な知識技能の注入記憶反復訓練を中心に営まれていることが、他府県同様に、あるいはそれ以上に近年の沖縄の学校教育の特徴のようだ。そうした学校教育のありように批判が高まり、改革の動きは広がっているが、それほど進んでいるわけではない。その改革の一つとして、絶対的存在としての学校を相対化しようとする動きがみられるが、まだ限定的であり、おおよそは以前と変わらない、というか大変強固である現実がある。

この分野での学校教育を補完する役割を塾などが果たしているのは、日本の特性ともいえよう。さらに家族にも補完役割をはたさせているのだが、それを「家庭教育」だとする観念が、ここ30～40年来の沖縄で広がっている。そして、それらが肥大化することで、前回書いた他分野での「家庭教育」が縮小してきている。

2021年04月08日

## 「教育とは学校教育のことだ」という思い込み・思い違い 「教育での思い違い」連載2

「教育とは学校教育のことだ」「教育は学校を中心に回っている」という思い込み・思い違いが、いまでは普通にみられる。人々の生活に占める学校の割合が、ここ100年余りの間に劇的に高くなったことが一因だろう。学齢期の子どもでいうと、学校にいる時間は、朝8時から午後の半ば、ないしは夕方までという、生活時間のなかの主要な位置を占めるようになってきている。子どもにとっては「学校の時代」といえるほどだろう。

同じように、職業に就く大人にとっては、働く場所が、工場・事務所・現場といった会社がかかわる場になったのは、ここ数十年のことである。したがって、大人の職場という、まずは会社であり、「会社の時代」になった。

だが、子どもにしても大人にしても、このようになった時期は、それほど昔の話ではない。そして近年では、ますます学校の位置が上昇し、子どもの人生への決定的といえるほどの影響を学校がもたらしている。そのため、学校での失敗が一生「尾を引く」と感じられるから、「落ちこぼれない」ないように頑張り、親も子どもの奮闘を支援する。

とはいうものの、教育のなかのどれくらいを学校が担当しているのだろうか。教育の諸分野をあげて、学校がどの程度を担当しているのかを考えてみよう。

・生産（職業）の教育。田畑・工房・工場・現場・お店・事務所などの職業現場で、就職後に一定期間行われる研修としての教育、働きながら行なわれる教育（OJT）、つまり職場におけるものがかなりの比率を占めているから、学校でする職業教育は、数%以下であろう。なかには、職業に直結した実業系専門学校のように、数十%に上る所もあるが、そこで学ぶ子どもはそれほど多くない。

・生活（家事・介護・産育）の教育。家族と生活をともにしながら、家族が行う教育が大部分を占めているから、学校は数%ほどだろう。近年、家庭科などで比率をあげているが、学校教育のなかでの位置はそれほど高くない。

ところが「家庭ですべきことまで学校に任せる」親が多いという苦情を、学校教師から聞くことが多い。生活の教育・家事の教育は「家庭」が担当すべきという見方がかなり強く存在しているのである。

と同時に、学校教育をとおして、家事の「近代化・合理化」を図ろうとする動きが、数十年前には「盛り上がった」。いまでも、学校が家庭教育を「指導する」という名残はないだろうか。給食で、子どもの栄養状況を改善するにとどまらず、「家庭」の食事改善を図ろうとする動きは結構強いように思う。

欧米の人々から見ると、日本の学校は「家庭」に関与しすぎているのではないか、という疑問をもつ例が多いようだ。

同じことは、道徳教育についても聞こえてくる。

2021年04月03日

## 教育での思い込み・思い違いは多くて大きい 「教育での思い違い」連載1

教育というと、実に分野が広い。そこで今回は、「子どもの教育」に絞ることにする。ではそれ以外にどんな教育があるのか。たとえば、社会教育、企業内教育、再教育（矯正教育）などが思い浮かぶ。

また、大人の子どもの働きかけには、教育以外に、共同作業・遊び・外出・行事、衣食住の保障、保護・安全確保、世話（ケア）、治療、これらが重なったものとして福祉などいろいろとあるが、それらと教育とが結びついて行われることも多い。

こうした広い分野のなかで「子どもの教育」は、どういうことに焦点化されるのかということ、まずは「子どもの成長発達にかかわってなされること」といえよう。角度を変えていうと、「社会のありよう、大人の願いに応えるようになること」ともいえよう。

しかし、こんな子どもの教育について、実はいろいろな思い込み、ときには思い違いともいえるようなものが、いろいろなところに見られる。

また、教育というつもりがなくても、周りからいわれて、実際は教育であると気づくことも多い。むしろ、その方が多いかもしれない。「これも教育なんだなあ」と気づくのだ。

子どもの教育は、現代では、子どもがいる人、子どもにかかわる人にとっては大きなことで、生活のかなりの部分を占めることがよく見られる。そういう人にとっては、心配事の大きなかたまりとして、子どもの教育があることが大変多いようだ。

それだけ関心が高く「思い入れ」が深く、手間暇をかけて関わることが多い子どもの教育であるからこそ、あるいはそうでありながら、「思い込み」、さらには「思い違い」が、結構みられる。

以下、「思い込み」「思い違い」が多いと思われることについて、いろいろと述べていくことにしよう。事例の大半は、沖縄でのことだが、他府県でも見られることが多いであろう。

## 学校外（家族・地域など）教育

2021年02月02日

### 3～6個も部活をして楽しんでいる高校生

正月に出会った話。親戚の高校一年生が、部活エンジョイ生活。中心部活は音楽系だが、他にスポーツ系2つにも所属している。加えて、他に3つのスポーツ部活にも顔を出すという。いずれも、彼はかなり熱心にやっているようだ。

学習面は、好きでなさそうだが、これだけ充実してやっていれば、すごいと思う。部費の調達が大変だということで、わが庭畑仕事のアルバイトをしてみないか、と誘うとのってくる。まだ実現していないが。

この学校に制服はないので、カジュアルな格好で、自転車通学している。

楽しく高校生活をしているのが何よりだ。

部活にしても高校にしても、以前にはなかったありようが生まれつつあるようだ。

そういえば、彼はスポーツ優秀の血筋をひいているようだ。先日、テニポンに誘ったら、やってきて、すぐに覚える。最初のうちはつきあえた私だが、すぐに、かれのパワーについていけない。若い人に相手をしてもらった。

私は結婚して、スポーツで活躍する人たちと親戚になった。一人は沖縄空手の年表にもでてくる。もう一人は、ゴルフチャンピオンだ。その子どもや孫も、そうそうたるメンバー。沖縄チャンピオンに飽き足らず、県外に出て活躍しているものもいる。

ついでながら、スポーツだけでなく、囲碁も5段級が溢れている。すごい人たちと姻戚関係になった私だ。だけど、そんな親戚も別世界に行った人が多くなり、寂しい思いをしている。

2020年12月19日

### 南城市「こどものまち」宣言の素晴らしい文案を子どもたち自身が作る

12日、十数名のこども（小中高校生）が参加して開かれた三回目のワークショップで、「こどものまち」宣言の文案を作り上げた。私個人の想定をはるかに上回る素晴らしいものだ。これからは、役所がかかわる文章も、大人たちより子どもたちにつくってもらったほうが、ずっといいと思ってしまうほどだ。

『こどもが自由に夢や希望をもつまち』で『挑戦はあなたを変える』という趣旨で、多面的なことに視野を向けている。公開されて読めば、大人もこどもも驚くだろう。

この後は、文案の趣旨にもとづいて、具体的な施策をつくり実施していくという段取りだ。

これまた当然のことながら、子どもたち自身がかわって作り、実施していくものになるだろう。子どもたちが作った案の一つには、「宣言」の毎年バージョンを作ろうというのがあった。2021年バージョン、2022年バージョンというわけだ。そこまでは無理があるとしても、毎年、子どもたちが中心になって、宣言と施策をバージョンアップしていくことが期待される。

南城市には、大人が作ったアイデアを子どもが審査選定する「アガリティータ」プランというものを10年以上にわ

たってすすめてきた実績がある。

今回は、こどもたち自身のことだから、こどもたち自身がつくるのは当然だろう。このあと、施策についても、こどもたちから素晴らしいアイデアが寄せられることだろう。

期待し楽しみにしていきたい。

2020年11月14日

## 家族の教育の新たな展開 学校外（家族・地域など）教育8最終回

前回述べた家族教育（家庭教育）の登場には、いくつかのヤマがある。それは都市部が先行するが、戦後では農村部でも、時間をおかずに展開する点が注目される。そのヤマを戦後に絞ってならべよう。

- 1) 1960年ごろ 生活改善（合理化）運動や社会教育（公民館を軸として）の活性化のなかで
- 2) 1970年代80年代 進学問題としての登場
- 3) 1990年代 学力向上運動としての展開

2) 3) の時期をとおして、学校が家族の教育を制覇し、「教育家族」が一般化し、子どもの家業従事・家事手伝いが消滅し、家庭学習が軸になって展開する。

こうした動きのなかで、新たな家族の教育の動向が生まれてくる。その象徴的な存在として、学童クラブがあり、保育園がある。

学童クラブは、働く親の必要の中で生まれてくる。そのなかで、親たちが相談して学童クラブをつくり運営に当たる例が続出する。少数とはいえ、そうした保育園もみられる。

そして、学童クラブや保育園の保護者組織を通して、親同士の交流提携が進み、家族の教育の新たな動向を作り出している。閉じられた家族から開かれた家族へと移っていく傾向も出てくる。中には、オールタナティブな学校をつくり、そこに子ども達が通う例も出てくる。

それらは、ほぼ半世紀にわたって続いた既存の学校に過度に依存することをやめるものといえよう。ということで、今後の展開は、どうなっていくのだろうか。

加えて、家族の変化再編も進行し、単身家族を含め新しい家族の形が広がりつつある。ここ数十年間にわたって「標準」とされてきた核家族は、実際には以前からそれほど多くはなかったが、ますます少数派になってきつつある。そのなかで、子どもや「家族の教育」はどうなっていくのだろうか。

大雑把なイメージを示しておこう。

20世紀初めまで 国家（王府なども）——（学校）——地域（≒シマ共同体）（家族・個人）

21世紀の現在に至るまでの変化

- ・社会の広がり 多様なアソシエーションの登場 地域の希薄化 家族の登場と変容 個人の登場・拡大
- ・学校の絶対化（学校進行・学校依存）の進行、他方での学校の相対化の進行
- ・これらのなかでの、多様な学校外教育の登場と拡大

これ以降については、準備がまだできていないので、改めて書けるようになることを期したい。

2020年11月09日

## 都市部の変化 学校外（家族・地域など）教育7

前回まで、どちらかという、かつて住民の多くを占めた農村部を中心に述べてきたが、ここでは、多くの働き手が「勤め人」となり、都市ないしは周辺部で働きはじめた1960年代からの都市における教育動向に焦点をあてよう。

王府時代、都市部というと首里那覇、そして平良石垣のごく一部に限定され、住民は士族と町方百姓に限られていた。明治期に入り、身分制の廃止と職業や居住地移動の自由が認められ、土地の売買も認められ、商品経済が広がる中で、農村から都市への移動が始まる。

そして、戦後、戦争と基地づくりのために、農村から追い出され、金銭商品経済の浸透の中で、自給自足から現金取得が不可欠となる生活への移行がすすみ、1960年代に入ると、農業を継ぐ若者はわずかになる。やがて都市部人口が農村部人口を上回るようになり、農村部にあっても都市型生活の比重が高くなっていく。

そうすると、子ども若者の就職を含む人生設計のうえで、学校教育の位置が急上昇していき、学校を、強制されて通う義務的なものとして受け取るのではなく、自主的選択として受け取る層が拡大していく。

那覇首里では、そうした人々がすでに明治後期から生まれて、都市文化を育み、その中で学校が占める比重も徐々に高くなる。象徴的なものとして、幼稚園登園、中等学校進学がある。また、書物購読や新聞・ラジオなどのマスメディアの影響もあらわれてくる。大正期における雑誌購読者や図書館利用者は、都市文化の担い手となってくる。また、明治後期から広がる沖縄芸能観客もそうである。

戦後になると、基地造成で追い出された人々がつくる地域社会は、いやおうなしに都市社会的様相を占める、当初はそれまでの農村社会における共同体（シマ）にならうものが多かったが、1960年代からはアソシエーション的な都市社会に対応する地域づくりへと変化していく。

彼らにおいては、先に述べた家族の教育（家庭教育）が成立し、家族生活での教育（学校教育依存の教育）の比重を高くしていく。

2020年11月04日

## 「地域の教育」の多様な展開 学校外（家族・地域など）教育6

### 4) 「地域の教育」の多様な展開

ここでは、共同体（シマ）の教育が変化していくことと並行して生まれてきた「地域の教育」の多様な展開について述べよう。最初に、地域の教育というわけではないが、見落としてはならないのは、ラジオ・映画・テレビなどの「メディアを通しての教育」である。

かつての教訓話、ことわざ、童謡などには、それらの原型としての役目をもつものがあっただろう。なお、王府時代に、メディアを通しての教育ともいえそうな、『御教条』などを地方役人を通して住民に聞かせることが行われていたとのことであるが、どの程度の『教育』効果をもったのだろうか。はっきりとしたことはわからない。

共同体（シマ）の弱体化は、1970年代以降顕著になる。字幼稚園（保育園）、学事奨励会、教育隣組の閉鎖が象徴的

出来事である。それに代わって、アソシエーション（結社）的な組織が、役割を代行し始める。学習塾・お稽古事塾・スポーツ少年団が象徴的存在である。

これらが、共同体（シマ）における教育に代わって、「地域の教育」の主要な位置を占めていく。と同時に、これらが、学校教育と深いかかわりをもちつつ進行してきたことに注目しておきたい。

「地域の教育」には、もう一つ長く「社会教育」と呼ばれてきた営みがある。明治末期から青年団・学校などがかわって「夜学」などが開かれていた。共通語強制・風俗「改善」など、学校教育を住民教化に活用する性格が強く、住民たちの自主的学習とは正反対に近い。徴兵強化と結びついており、在郷軍人会などもからんでいく。

戦後期になると、学校教員が社会教育職員に配置され、字公民館・婦人会などの組織と結びついて、多様な活動を展開した。社会教育を推進する組織も活発な動きを見せていく。1972年「復帰」ころになると、本土法制にもとづく市町村公民館、青年の家、少年自然の家などの施設が設置されていく。

1970～90年代に、他府県から調査のために来沖した多くの社会教育研究者が注目したことがある。それは、沖縄における字公民館の存在と活躍である。それは他府県には見られないレベルの活躍である。それらは、教育と意識して展開しているとはいえないが、集落の生活と文化を継承維持創造していく点で、他府県では見られないものであった。わけても、字誌を多くの集落が編集発行している点が注目された。外部の研究者などに委託するのではなく、字の住民自身が、聞き取りや実地調査などによって作成したものである。その中でも、戦争体験の聞き取りはとくに注目された。

1980年代以降になると、それまで社会教育とよばれてきたもののなかに、「生涯学習」と呼ばれる取り組みが広がっていく。市町村やカルチャーセンターが主催する多様な講座が日常的に行われ、多くの住民が学ぶ。そして、無数といえるほどのサークルが、文化芸能・スポーツ・教養など多様な分野で広がっていく。それらは、血縁地縁とは異なった、人々のつながりを生み出していく。それらが、住民市民の自己教育的性格をもちつつ、地域の教育の新しい様相を作り出していく。それらがボランティア活動ともつながり、福祉・地域おこしなど、新たな地域社会を築きつつある点にも注目していきたい。

2020年10月28日

## 共同体（シマ）の教育 学校外（家族・地域など）教育5

### 3) 共同体（シマ）の教育

前回まで述べた60年以上前の家族の教育の大半は、共同体（シマ）の教育と重なっていた。

明治以降の子どもの教育については、家族・地域共同体（シマ）・統治（国の施策）という三つの層で考える必要がある。

※ なお中間形態として親族組織としてのハラ（門中）がある。とはいえ、ハラ（門中）に教育活動があったかどうか、あったとすればどのようなものだったのか、などについては未解明であることが多い。

共同体（シマ）と家族との関係は、1945年ないしは1960年代まで未分化な面が強い。それ以前の19世紀末までは、両者を区分してとらえることが困難になる時があるほどである。

明治期に入り、とくに20世紀に入って、金銭経済の浸透と旧民法の家制度という統治で、家族単位が強化され、共同体（シマ）からの分化が進行する。それは、共同体（シマ）の役割・位置の相対的低下でもあるが、それでもなお、1960年代までは重要な役割を果たし続ける。



こうした変化をわかりやすく示すのは、冠婚葬祭の実施主体の次のような移行である。

シマ→(門中→)家(家族)→個人(アソシエーション 会費制結婚式)

また、通婚圏の変化も、その例である。※通婚圏とは、配偶者を選ぶ地域的範囲のことである。

通婚圏がシマを超えたのは、1960年代が多く、その時期に、シマと家族の分化が進行したことを示す一つの指標となっている。

と同時に、家族から個人が独立していく動きも芽生え、広がっていく。戦前でいうと、糸満売り、辻売り、ヒヨウ、住み込み、子守などにもそうした要素を含んでいた。そこでは、金銭商品単位として子どもが位置づいていた。富裕層の子弟にあっては、「教育投資」的性格をも帯びていた上級学校への進学がそうした要素をはらんでいた。戦後、とくに1980年代以降は、個人が共同体や家族からの独立を徐々に強めていく。

共同体(シマ)における子どもの教育については、共同作業・集落祭祀などがあるが、分かりやすいのは子ども行事である。いまでは家族行事のようになっているムーチーも、かつては地域行事である。わけてもムーチーユレーに注目したい。シマの子ども達が集まって、小屋を作り、そこで飲食し語りあうのだ。そこには、子ども達の自治があった。最後には、大人たちの防火監視のもとであるが、小屋を燃やすのだ。

これらの行事は、戦後しばらくはあったようだが、徐々に消えていく。それでも、字幼稚園(保育園)、学事奨励会、教育隣組、そしてシマ行事での芸能の披露などが、シマの取組みとして1970年代初めまで行われていた。なかには、芸能行事のように近年に至るまで維持される集落もある。

2020年10月23日

## 家族における教育2 学校外(家族・地域など)教育4

前回書いた教育は、60年前までの話であるが、それ以降激変を重ねてきた。いくつか指摘しておこう。

- ・生産(家業)の教育は、ほとんど消滅した。農業などの自営業をやめて、「勤め人」になることが広がり、生産の教育を行う事ができなくなったのだ。
- ・家事の教育は、「お手伝い」をさせながら教えるという形の過渡期を経て、近年では消滅に近い例が多い。家を出て一人暮らしを始めても、自炊ができない若者が1980年代から増えてきたのは、その一例だろう。
- ・「勉強しなさい」を他の諸分野から抜きんでて重視する家族が激増し、一般化したと言えるほどである。
- ※子どもの学校での失敗や学校からの排除という困難を抱えた子どもを支えて「フォロー」する役目を、家族が果たすことも大きい。いじめや不登校にはそうした事例は多い。仕事探しをはじめとして、学校以外での生き方探しをサポートすることもある。それらをきっかけに、学校万能主義から脱け出して、家族の教育に開眼することも多い。
- ・教育費と言う形での、子どものための教育にかかわる経費支出の出現と増大。
- 子どもの大学・短大・専門学校進学のために、所有する畑を一枚売るといった事例もある。
- ・家族成員数の激減と、家族の閉鎖性の増大

これらの変化を通して、事態はまるっきり変わってしまった。それは、家族自身が意図してそうなったというのではなく、外部の社会が変動していく中で生じた事である。社会変動に「合わせて」家族が対応することが中心になるなかで生じた変化である。

60年以上前は、家族がある共同体（シマ）に合わせて、家族が対応することが中心だったが、共同体（シマ）を越えた社会、わけても「学校→職場」という流れに合わせるようになったのである。

2020年10月18日

## 家族における教育 1 学校外（家族・地域など）教育 3

### 2) 「家族における教育」

家庭教育というと、「家庭において行われている教育」と思うのが普通だ。ところが、現在の沖縄では大変限定した意味で使われている。つまり「学校での子どもの成功を助ける家庭での教育」といいよ意味で使われることが多いのだ。

家庭学習という言葉もよく使われるが、それは、「学校が提示するものを、子どもが家庭の場で行なう学習」である。その多くは「宿題の学習」のことである。それを親が励ましチェックすることを「家庭教育」だと思ふ親も多いようだ。

さらに、学校での学習を補う性格が色濃い学習塾・予備校など、あるいは高校受験大学受験などに取り組む子どもたちを助け励ますことが家庭教育だという観念が広く見られる。

こうした意味に絞ることで、「家族（家庭）において行われている教育」が、極度にやせ衰えていることに気づく人は多くない。

※ 歴史を含めた社会科学について語る際には、「家庭」用語ではなく「家族」用語を使うのが通例なので、以下「家族」用語を使用する。「家庭」用語には、核家族、とくに愛情あふれる暖かい夫婦親子関係がイメージされやすい。「家族」用語には、そうしたものに限定されず、家族には多様なありようがあることを前提に語られる。

「家族において行われている教育」は、実に多様なものを含んでいるが、60年以上前、つまり現在の70歳代以上の方々が子どもだったころを思い出すのが手っ取り早い。「家族における教育」は、親が子どもに対して行うもので、その内容方法は、生活・生産・人間関係などにかかわって、子どもが成人するまでに身に付けておくことが必要だと親が考えるもので、親自身が受けてきたものを引き継いでいることが通例だ。その分野を並べてみよう。

・家業教育（生産教育） 当時までは農業が圧倒的に多いが、多様な農業労働を、子どもたちは親の労働を見ながら真似ながら学んでいく。時には、親が指示し教えることもある。年齢に応じて任される仕事がある。山羊の餌の草刈やウーヅトシ（さとうきび刈り）が代表例だ。

・家事にかかわる教育 食事づくりや後片付けや掃除などが代表例だろう。小さな弟妹の子守などもある。カマドで使う燃料集めの仕事もあった。100年位前までは、家族が着る衣服を制作することも家族の仕事であった。見よう見まねで身に付けるが、時に親が教える事もある。

・衣食住などの自己管理 衣服の着脱からはじまり、自分のことは自分ですするという自立・自律が目標である。

・人間関係の教育 家族内外で生まれる人間関係を教育する。親子関係、兄弟姉妹関係、親戚関係、地域関係など

・人生観世界観の教育 祖先祭祀、共同体（シマ）・沖縄・自然・人間観をめぐる教育がある。

・家族内の諸行事などを行うための教育 出産祝から葬儀までの人生儀礼、盆正月などの年中儀礼、ヒヌカンなどの日常儀礼などにかかわる教育

親が教えることがあると書いたが、ときには兄・姉・叔父叔母などの年長者が教えることもある。昔話（チテーバナ

シ・伝え話)・ことわざ・歌詞を使うこともあった。

2020年10月15日

### こどものまちワークショップ

10月10日、南城市役所で、南城市「こどものまち」宣言の文案をつくるワークショップの第一回目が開かれた。小中高生16名にサポーターの大人が加わった素敵な会。市内小中学生が書いた千をはるかに越すワード（ほんの一部を下に掲載）をもとに、それをさらに発展させるというものだ。三回開いて、文案作成を進めるのだ。

会場には、学童クラブの子どもたちが描いた関連するテーマでの絵がたくさん貼られた（写真はその一つ）。これがすごい絵だ。

大人では思い付くのが難しい豊かで新鮮な発想に満ちたことが続出。子どもたちは、実によくやる。どんどん進んでいく。案ずるよりはやってみることだ、という感じで、想定をはるかに超えた充実ぶりだ。

ここで出たアイデアを市内各地に貼りだして、さらに意見を求めていく。期待できそうだ。



ワードのごく一部 全部で千を超す。

だれだってまちがうことはあるけど、それはチャンス

めっちゃほめられるとうれしい

自分を信じる 推ししか勝たん♡

だいじょうぶ、みんなはじめはできなかったから！

最強のてきだったなら次は最強のみかた



活気のある優しさや思いやりの集まった心(♡)の町

自然も幸せな南城市

今は大変でも大人は意外と楽しいかも

明日という漢字は明るい日とかいて明日と読む

カブトムシのように強く正しくのびていくよ

かんぺきより、楽しむほうがいいよ

2020年10月13日

## 沖縄教育史の歴史 学校外（家族・地域など）教育2

前回に続いて、沖縄教育史の歴史について書いていこう。

・明治以降の沖縄の学校では、政府が「外」「上」から持ち込んだことを起点に展開した。そのため政府が定めた中央標準に合わない「遅れた沖縄」を同化し、「近代化」することに学校がどれだけの役割を果たしたかに焦点をあてて記述することが、それまでの沖縄教育史記述の主要な特質をなした。加えて学校生徒だけでなくその親たち、地域住民をいかに教化しえたか、しえなかったかという視点が重視された。

・首里王府時代においては、士族の子どもを対照にした記述が中心であり、一部に地方役人層の子どもを対象にした教育も含んでいたが、それ以外を対象にする教育活動は視野外に置かれた。それ以外には学校がなかったからだ。また、明治期にあっては、旧士族、旧地方役人層、都市富裕層を中心に描いていた。そして、こうした身分や社会階層による違いに注目する研究は限られていた。

・それまでの研究は、教育にかかわる政治政策にまずは焦点を当てるものであった。記述の中心を占めた学校においても、為政者が展開した政策・制度とそれへの地元の対応の叙述にとどまり、教育実践の実態把握に及ぶものはほとんどなかった。せいぜい、教科・教材・教科書についての記述どまりだった。

こうした問題点に注目したきっかけには、いくつかの先行研究があった。一つは、1960～70年代に先駆的に沖縄教育史研究を進めた森田俊男著作である。私は、それに刺激を受けつつ、沖縄生活を始めた1970年代に沖縄教育史研究を始めた。そして、田港朝昭の19世紀における地方役人層の変化についての研究にも刺激を受けた。だから、私の研究開始時の焦点は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての地方役人層の動向と、明治政府による小学校への就学督促の地方における展開、さらには教員形成にあてられた。

そして、1980年代に入って、中内敏夫の「新しい教育史」の提起は強い刺激を与えた。それは、「子どもの発見」で知られるアリエスらがヨーロッパにおいて先行的に展開した社会史を、日本でも追求する動向であった。それは、人々の地域や家族での生産生活と結びついた社会史としての教育的活動に着目するものであった。

そこで、私が書いた『沖縄県の教育史』では、たとえば首里王府時代でいうと、身分ごとに叙述し、とくに農民層の生活場面における事実上の教育活動に注目して書いた。あるいは、遺言書・ことわざ・琉歌などにも着目し、人々の子ども観・教育観について述べたのである

2020年10月10日

## 「沖縄の子ども・教育・福祉 2013～2020年」をホームページに掲載

先日、このブログに書いてきた関連記事を集約編集して、「沖縄の子ども・教育・福祉 2013～2020年」というタイトルで、ホームページ「浅野誠・恵美子の世界」<https://asaoki.jimdofree.com/> に掲載した。

内容は、大きく4つになる。

- ・沖縄の子どもをめぐる福祉・教育・行政の取組み 2020年の31回にわたる連載
- ・学童クラブ 2017～2020年にわたる沖縄の学童クラブについての32の記事
- ・南城市こどものまち宣言策定 2019～2020年の38回にわたる連載

## ・沖縄の教育 2013～2019年の19の記事

関心をお持ちの方、お読みいただいて、感想などをお寄せいただくと幸いです。

2020年10月08日

**沖縄と南城についての新連載のあらまし 近代以降の沖縄における学校外（家族・地域など）教育1**

沖縄について、あるいは南城について、これまでもいろいろと書いてきたが、それでもなお私の頭に新しく浮かんでくるものが多い。歴史にかかわるものが中心だ。そこで、「つれづれなるままに」綴っていこう。

小タイトルをつけたものを、数回連載する形になるだろう。小タイトルがいくつになるかはわからない。まずは、2021年春ごろまで続くだろう。

今のところ予定している小タイトルを紹介しておこう。

- A. 近代以降の沖縄における学校外（家族・地域など）教育
- B. 沖縄若者（人生前半期）の歴史的分析和将来展望
- C. 南城論

## A. 近代以降の沖縄における学校外（家族・地域など）教育

## 1) 沖縄教育史の歴史

浅野誠『沖縄県の教育史』（1991年思文閣）を発刊して、もう30年になる。同書は、それまでの沖縄教育史著作に対して、いくつかの点で批判的であり、私なりの挑戦・創造をおこなったものである。そのいくつかを並べてみよう。

・教育とは学校のことだという考え方を超えること。教育活動は、学校以外の多様な場で多様に行われてきた。「これが教育だ」と当人たちが思っていなくても、客観的に見ると教育であることはいろいろとある。たとえば、子どもへの「躰」と言われているもの。家業手伝いをさせながら、子どもに家業のワザを教えること。新入社員教育といわれるもの。などがある。こうした多様な教育活動のなかの一つとして、学校教育が存在するのだ。

ところが、それまでの沖縄教育史の研究は、学校教育に限定するものがほとんどだった。だから、首里王府時代では、国学・平等学校・村学校・明倫堂・筆算稽古所など、明治以降では、小学校・中学校などに限定して記述していたのだ。

## 2019～2020年

2020年08月25日

### 大学リストラへの動き 新しい大学教育創造の模索

新型コロナウイルス流行の影響を受けて、アメリカでは大学リストラが始まり、「弱小」大学の閉鎖なども始まりそうだという事だ。大量の教員解雇も出てきたという。その背景に、新型コロナ対策としての遠隔授業では、学生たちが大学に所属する価値を感じず、大学から引き始めたからだという。一方的大量講義スタイルを遠隔授業にすることが、問題発生の焦点のようだ。言い方を替えると、大学教育バブルの象徴ともいえるべき大規模講義をきっかけに、バブルがはじけ始めたということだろう。

高い授業料を払って受け取る知識をはじめとする諸価値が、授業料に加えて数年間という時間に見合うものかどうかを問い始めたということだろう。経済的豊かさをバックにして、より給料の高い雇用を得るために大学入学したが、その見返りを与えてくれるかどうかを検討し始めたともいえるのだろう。

同じことは、日本でも広がっていくのだろう。沖縄でいうと、大学を選ばないで、具体的な仕事に直結する実学を学ぶ専門学校を選び、卒業後専門を生かす現場で働く若者が、かねてから多い。大学でも学部新設となれば、実学的分野に焦点化する例が出てきている。

そうした傾向は、大学教員の中にも広がり、ドクターをもたないが、現場で実践のワザを深くに身に着けた人を教員採用する例が増えている。

遠隔授業については、今年度私の担当科目は閉講になったので、体験的に語るわけにはいかないが、いろいろな情報をもとに考えると、次のように言えるだろう。

遠隔授業は、これまでの通信教育を主としてインターネット回線を使用するものにしたと考えるのがわかりやすい。そこで、きちんと学習しているかどうかを確かめるために、受講生に与える課題が増えた事例が出ているようだ。そのため、受講生も毎回のようにレポートを送信しなくてはならないから、忙しくなり、それを読み返信する教員も忙しくなる例が多いようだ。もっとも、返信を送らない教員もいて、受講生の不評を買っていることもあるという。

その問題は、これまでの大規模授業につきまといがちであった一方的授業を改善し双方向型授業を展開することで打開しようとするものといえよう。

だが、共同学習・研究集団として、学生たちを育てていくこと、つまりは多方向型授業をつくりだしていくことには至っていない。その点で、ある芸術大学の一年生たち十数名が、ネット上でつながり、共同創造で作品を制作した例は、注目に値する。おそらく、そこには大学の教員または職員が、つなぎ役促進役を果たしただろう。

そうした方向での試みは、数が少なくても、これからの大学のありようを示唆するものだろう。こうした試行錯誤を経て、これまでの大教室中心、いいかえると大量生産大量消費型大学教育を変えていく示唆にもなるだろう。

こうした例をみるにつけ、従来型の大学教育を組み替える契機が生まれている点に注目したい。

2020年06月03日



## 中学生高校生が読む本、神谷拓『僕たちの部活改革 部活自治・10のステップ』かもがわ出版2020年

出たばかりの本を贈呈される。「働き方改革も、ブラック部活も、生徒主体の部活で解決する」「小説でわかる部活動の解説書」という帯の言葉。その通りだ。

毎年のように出版される神谷さんの部活論を、生徒向けに書いた集大成の本という印象。

どんどんわかりやすくなってきた。部活顧問などの学校教員にも、実践イメージがつかみやすくて、かつ筋が通った書。

彼の性格通り、豪速球だが、なぜだか「やさしい」雰囲気にも包まれている。

この後、かれの研究が、どんな風に進化していくか読めないが、楽しみだ。そろそろ休憩とか、世界旅に出てもいいと思うが、できたばかりの部活動学会の会長にも就任したし、忙しすぎるだろうか。

主な章タイトルを並べておこう。

- ・部活の名前に込めた願い
- ・個性がいきる部活の係
- ・先輩、部費っていくらですか？
- ・ガイドラインを作るのは誰か？
- ・体育の授業とトレーニング
- ・シュールなエンディング 勝ち負けよりもプロセスのカチ
- ・新チームの発足。キャプテンは・・・
- ・部活動指導員がやってきた 自治とトラブルの可視化
- ・部活動を入試面接に活かす

2020年04月17日

## 鈴木庸裕・住友剛・榎屋二郎編著『「いじめ防止対策」と子どもの権利』かもがわ出版2020年

編著者から贈呈された最新刊本。発刊趣旨が次のように書かれている。

「本書は、いじめ防止対策推進法上の「重大事態」の未然防止・再発防止の取り組みや発生時の対応について、「子どもの権利擁護」の観点から、「実際に誰が、どのような対応をすればいいのか？」という「実



務的なこと」にこだわってまとめたものです。特に本書では、重大事態発生時に設置される調査委員会（第三者委員会）の運営のあり方や、その調査・検証の結果をふまえて提案される再発防止策の実施のあり方を中心に論じてみました。」  
p 204

この趣旨通りの内容である。こうした事態にであい、担当し関係者となった方々はどのようにすればよいか戸惑うことが多いだろうが、そうした方々が参照できることが多い本だ。ともすれば、行政処理的になってしまい、当事者の子どもや保護者の不信を作り出したり、いじめ構図を解決する現場取り組みを促進せずに、防御的姿勢を学校現場に生み出したりする状況が目につく。

そうではなく、関係者が協力協同し合って、事態の前向き解決を作り出すための示唆に富む書籍だ。

執筆者は、調査委員会（第三者委員会）にかかわった経験をもつ教育研究者、弁護士、福祉職、精神科医師、修復的アプローチ専門家、スクールソーシャルワーカー、養護教諭たちに加えて、いじめに結び付いた自死で子どもを失った保護者と、じつに多角的な人で構成されている。そうした多角的な方々がつながり協力しあうなかで解決方途を見いだしていこうとする。

それは、いじめ問題が、今日の子ども・学校・行政・関連分野における打開すべき課題となっていることを象徴しているともいえよう。

2020年03月27日

## 1970年代～2000年代前半に私がしてきたことを思い起こす 久々の全生研

大阪旅は、「全生研研究委員会集団づくりの探求部会」からの要請で、「集団づくりのこれまでを振り返りつつ、新しい集団づくりを探る」にかかわる話をするためであった。

近畿を中心にして20名ぐらいの方々が集まってくださった。

私の話は、「生活指導実践の理論を構築することをめぐって、全生研が持ってきた多様な視野の歴史 個人体験を含めて」というレジメをもとにしたものだ。私が全生研の役員を務めたのは、1971～2007年であり、役員を下りてもう15年近くがたち、現在の事情には無知であるので、私が経験してきたこととお話した。

会の前半は、私の話だが、後半は参加者による討論だった。参加者の半数は、現在60代で、この時期、私と共に多様に実践、研究を共にしてきた方々で、10数年ぶりにお会いする人ばかりだった。他は、初対面が多い若い方々、加えて高生研の方々であった。討論は多彩かつ白熱したものであり、夜の懇親会まで続いていった。

ありがたいことに、私自身がやってきたことの位置・意味を掘り下げる点でとても有益なものだった。

私の提起は長いので、いつか文章にしようかと思うが、今回はキーワードのみ紹介しよう。

社会構造変化に対応する集団づくり

右上がりのなかでの民主主義追求

低成長・定常化・縮小のなかでの集団づくり

対立・揺れを豊かさにしていく

組織論的追求

後期的段階

中央集権型と統一戦線型



強力な組織とサークル活動

唯一正解主義 「正しいものについてこい」型

「違いを超えて」ではなく、「違いを持ち寄って」

多元性多様性の追求

異質協同型集団づくり

参加 学校協議会

福祉

競争

心理的アプローチ

発達論

自己遡及論（再帰論） 教育実践の自己展開サイクル

実践記録執筆

技術と思想

階層 格差・貧困

指導性 支援・援助・ケア

ワークショップ 共同創造としての授業

生き方としての生活指導論

世界のなかでの生活指導・集団づくり

おおよその趣旨を示しておこう。

1950年代末から80年代半ばの「右上がり」の時期に、集団づくりの実践と理論は、民主主義を軸にして、学校・学級を含め強力な組織をつくる思想・技術を形成してきた。それはかなり権威あるものになっていく。しかし、80年代以降表面化してくる「右上がりではない」社会状況・学校状況のなかで、それらの権威を相対化し、「違いをもちよって」作り出す異質協同的なありよう、学校・学級、そして社会のなかに多様な組織を生み出していく道を模索創造する実践と理論の探求が長期にわたって展開されていく。その中の一人として、私は歩んできた。

2020年01月24日

## 「エーッ」と驚きが多い ヨルダン教育関係者に「日本教育史」の講義をする

近隣に住む知人を通しての依頼で、21日にJICA沖縄の国際センターで、ヨルダンから来た教育関係者対象に「日本教育史」の講義をした。こんなことは、当の私自身も驚きだ。いくつかの初体験を書こう。

- ・「日本教育史」の講義は、1980年代まで琉球大学で担当していたが、その後していないので、30年ぶりのことだ。沖縄教育史の話は何度かする機会があったが。

- ・ヨルダンの方々と出会うのは初めてだ。20年前のトロント大学で研究中に、数十か国の方々との出会いがあったが、ヨルダンの方とは初めてとなる。新聞などで目に付くレベルのものしか知らないの、初めて知ることが多い。

- ・ヘジャブスタイルの女性と身近に話すのも、初体験だろう。それにもいくつかのスタイルがあって、眼以外のすべてを覆っている方もおられる。休憩中の飲み物も、ハラール認証済ということだ。

・私の講義は日本語だが、事前に送付したレジメを翻訳する方がアラビア語に訳したものが配布された。アラビア語に生で触れるのも初めだ。通訳の方は、実は沖縄出身なのだが、すごくテンポよく元気に丁寧に通訳してくださった。感謝感謝である。だから、話はすごく通じた印象だ。

・JICA沖縄の国際センターを訪問するのは、30年以上ぶりだ。できたばかりのころ大学業務の関係で訪問した記憶だ。

・男性3名女性4名の「ヨルダン／初中等教育行政コース研修員」の方々は、教育省関係者、大学教員、現場教員の方々と、お若くて元気に満ちている。どんどん発言なさるので、講義というよりは、セミナーとか研究会のような雰囲気になった。

私が話したことのレジメ項目を紹介しておこう。

- 1) 沖縄（琉球）と日本
- 2) アジアと日本
- 3) 欧米と日本
- 4) 世界にリードされる日本 世界をリードした日本
- 5) 人口減少（少子高齢社会）・縮小経済の中で SDG s E S D
- 6) 身分と教育
- 7) 近代化と学校
- 8) 国家の教育と市民の教育
- 9) 中等教育高等教育進学拡大
- 10) 学校中心社会＝大企業中心社会のなかで、競争激化と序列化の進行
- 11) 教員
- 12) 共同 平和

・質疑応答の中で、多くの関心が寄せられたのは、教員の働き方、難題をもつ子どもへの対し方、などだ。共通して考えたい問題が、予想以上に多そうだ。

2019年11月17日

## 大学入試における記述式をめぐる問題 大学教育と入試のつながり 大学教員の力量増大

このごろ、大学入試における記述式や英語試験の民間委託をめぐる論議が盛んだ。私の主関心は、それらをめぐり利権がらみのことではなくて、受験生の創造的力量的増大、採点する大学関係者の採点力量増大の問題にある。

大学センターテストが画一的な大量データ処理として行われてきた弊害、つまり偏差値輪切り選抜システム、点数至上主義を持つことから抜け出し、個々人の創造的な学力を測ろうとしてセンターテストを廃止し、それに代わるものの模索が続いていることをめぐって、私なりの考えを書きたい。

センターテスト時代の当初、その画一性が初めから問題とされ、各大学で独自のものを展開し、センターテストの問題性をカバーしようというのは、各大学だけでなく当時の文部省も、その方針を打ち出していたと記憶している。

私は同僚たちと共に、1970年代後半から入試業務にかかわる中で、一人一人の受験生の創造的力量的をはかるための工夫をめぐって、記述式、表現形式、共同討論制作などについて、数年かけて多様な試行錯誤をし、新しい入試を実

際に展開することに深くかかわった。その後も20年間ほど、いろいろな工夫をしてきた。そのいくつかを書こう。

1) 読み書きにかかわる試験。成人して以降に必要な読み書きの中心は、文書・メール・書籍などの情報を読むこと、文字を使っての発信・文書作成、さらに文章を介しての思考などである。大学生になってからのことであると、書籍文献等を読む力量、レポート・卒論などを書く力量、発表討論する力量などとして現れてくる。そうしたことへの準備がどれだけできているかを測るものとして、入学試験が位置づく。

ところが、これまでのたいていの大学入試で、テスト問題に出されるのは、そのなかの限定された箇所である。漢字書き取り、代名詞は何をさすのかとか文の読取にかかわる出題が多い。それらは、大量処理での「効率性」「正確さ」「平等性」に配慮して、○×式、多肢選択型が多く、記述式があっても、驚くほどの短文だ。そして、必ず正解が一つだけ存在する。そうして指定された一つの正解に沿って採点される。それ以外の記入は「不適切」と見なされ、減点ないしは零点となる。

それは、これまでのセンターテストのように大量の機械処理に適合的なものだろうが、受験生の読み書き力量のなかのかなり限定された部分のみを測定している。

入学試験は、入学後の教育活動と連動する。だから、試験の採点は、教育活動を担う大学教員自身がするということが、通常のコトだろう。教育活動の前提となる力量を入学生がどれだけもっており、どのような特性があるのか、それらを知り、教育活動に結び付けていくのだ。その試みの一つとして初年次教育がある。

ところが、大学教員が採点しない入学試験が、広く見られる。典型的象徴的存在としてセンターテストがあったし、今論議されている外部委託などもそうである。

それは、大学教員の教育力量を向上させない。逆に大量の機械的採点に大学教員を適応させようとするものだろう。大学教員が採点にかかわらないことは、試験を教育とはかかわりが薄いものにさせる、つまり「非教育」的なものにし、「機械適応型」にしていく。と同時に、大学教員の採点力量を高めない、さらには入学試験との距離を広げ、ひいては教育活動への距離まで広げてしまう。そのことは、採点だけでなく、出題における問題性を拡大する。

大学教員が出題採点にかかわることは、新入生の教育と結びついた思考を要求するものだ。どの程度の力量を期待するか、不足があれば、大学教育でどう補充上昇させるか考える。

2019年11月22日

## 大学入試における記述式をめぐる問題（続き） 入学試験から大学教育は始まる

2) 論述式でも、難しい問題を出して、得点の高い限られた受験生をえり抜く出題をするか、大学教育で伸ばしていくための準備力量があるかどうかを確かめる平易な出題をするか、という選択がある。長く続いてきた経緯もあって、前者が多そうだ。

しかし、論述式が苦手の学生が大半を占める受験生に、従来型の難問をして、大半の受験生が零点に近い点数になって差が出なくなり、論述式試験が合否判定上ほとんど意味をもたなくなる例に出会ったことがあった。

そこで、大学入学後力量を伸ばせる基礎の力の有無がわかるような平易な問題が登場する。すると、文字に親しむ体験が多少なりともあれば、論述回答ができる。そうした準備力量をもっていれば、大学入学後に、教員が指導すれば、対応していけるはずだろう。

関連した話題。事前に合格が事実上決定している一芸に秀でた受験生に対して、面接をしたことがある。合否判定へのかかわりがほぼないから、私以外の担当者は、入学後の学習にかかわるような質問はしなかった。私もそうすべきだったかもしれないが、こんな質問をした。「大学では、書籍を読んで討論したりレポートを書いたりすることがしばしばあるのですが、高校生時代、あなたはどんな本を読みましたか。」

応えの多くは、一芸にかかわる雑誌（グラビア雑誌に近い）やコミック本だった。がっかりしつつも、これが現実なんだな、と感じた。後に、大学生になった受験生に出会う体験があったが、私の質問には、緊張が走ったらしい。事実上の内定をもらっているのに、真面目な質問を受けたからのようだ。

今や、「降り落とす」入試よりも、大学での学習への構えを作り出す入学試験が求められる時代だ。にもかかわらず、難問を出したり、大量機械処理で序列をつけたりすることに必死になる入学試験が支配しがちだ。

そうではなく、入学後の教育に結び付いた入学試験をする時代だといえよう。入学試験の過程で、すでに大学教育は始まっているととらえるのだ。

3) こんな入学試験問題にかかわったことがある。教員志望系が多い学部の試験だったので、現場教員の実践記録（入試にしては超長文）を読んで、登場人物の成長と成長した理由を書かせるのだ。とても楽しい文なので、受験生は楽しそうに回答を進めていた。監督していた試験官も楽しそうだ。

さて、採点会場に集まった教員たちから、こんな声があがった。「楽しい小論文テストでよかったけど、どうやって採点したらいいでしょうか。これまでの小論文テストとは異なるものですから」

そこで、予想される回答例を数十個抜き出して配布し、いくつ書かれているか数えるやり方がとられた。無論、それ以外の回答が出てきて、適切ならプラスされた。

ということで、採点会場は、大学教員の学習会・研究会の雰囲気にも包まれた。

4) こんな面接もある。受験生が書籍の一章を読むことから始まる。読み終わったら、「文章冒頭と終結部分では、異なる主張を書いているように見えるけど、どう考えますか。」という発問。すると、文意をつかめている人は、即答できる。つかめていない人は、できない。読書時間は一時間足らずだが、面接は、1~2分で完了。試験官は、一致して必要な段階に達しているかどうか判定できる。

5) 3時間かけて行う共同作業・共同討論の試験では、作業・討論過程に試験官がずっと立ち会いながら、ガイドの役目をする。終了後、試験官は、グループメンバーの得点を報告する。試験官内の大きな違いがある時は、試験官で話し合う。目立つ学生に高得点を与えているが、目立たない学生の目立たない発言がグループ活動に大きな貢献をしていることを指摘されて、改めてその学生にも高得点を与える、といった過程が繰り返される。

相当な時間を費やして、試験官が納得し合う結論にたどりつく。これなども、試験官である大学教員の研究会そのものであった。

こうした過程を経て入学してきた学生には、入試とつながった教育活動が展開していけるのだ。

## 2013～2017年

※2017年刊行の「教育2008～2015年」に掲載もれになってしまった記事を掲載する

2017年08月10日

嘉納英明「子どもの貧困問題と大学の地域貢献」名桜大学発行

沖縄タイムス発売2017年を読む

最新版を送っていただいた。

まさにタイトル通りの中身の本だ。著者はますます活躍している。一昨年、名桜大学で開かれた九州教育学会で再会し、その際のシンポジウムで同席したが、その時の問題提起も本書に掲載されている。

大学が地域貢献として、子どもの貧困問題に取り組むことは画期的だ。各章タイトルを紹介しよう。

やんばるの地で大学の地域貢献を考える

沖縄の子どもの貧困問題について考える

子どもの貧困対策としての「無料塾」の設立

生活困窮世帯の中学生への学習支援事業と学生ボランティアの学び

沖縄における産官学連携の子どもの居場所づくり

著者は、30余年前、私の授業を受講していたが、その後の素晴らしい活躍ぶりに感嘆するほどだ。研究だけでなく、大学業務、そして社会的活動にと、活躍分野が広がっている。ますますの御活躍を祈念するとともに、お身体には気をつけられるよう、お願いしたい。



2017年08月07日

丹野清彦「今週の学級づくり」高文研2017年を読む

著者からいただいた本。小学校教師にターゲットを絞って、一年間の学級担任の指導の流れを極めて具体的に示す。例として、9月の項を紹介しよう。

9月 はじめからていねいに。本当のスタート

1週 今週、力をいれること！ 月曜の朝に。

2週 小さな取り組みで班を意識

3週 本格的に音読をきたえる。疲れる授業を

4週 芸術の秋、大事な文や図は写させる

※知っとく 取り組みの目標は、3つのステップで飛躍する

著者の暖かく優しい人柄が、すごくあらわれている。そして、イメージ豊かで、物語性にあふれている。大変、実践的でありつつ、子どもたちが作る学級の世界へと押し進めていくワザと希望に満ちている。

2年前、私の琉球大学での授業開始直前に、突然顔を出されたのが、10年以上ぶりの再会。パートナーも、10年以上ぶりの再会。私とは、別々に出会ったお二人が、今度は一緒になって沖縄に赴任。驚いた。そして、我が家のハーブティーのとりこになられた。

本当に、物語はどう展開するかわからない。学級の物語も、実際はそうなのだ。お二人とは、つきあいが長くなりそうな予感がする。

お二人の今後のますますの幸せと充実に期待している。

2017年07月23日

### 鈴木庸裕「学校福祉のデザイン」かもがわ出版2017年を読む

1980年代前後から、学校がシステムとして、子どもたちの学習だけでなく、生活・生き方を強くコントロールしてきた。そのころより、子どもたちは、校内暴力・不登校・いじめなどという形で、大人の理解を越えるような行動を噴出してきた。そして、子どもたちは、自分の生活そして人生を自分なりに創造していく姿勢を弱め、システムとしての学校に従順に振る舞うしかないところに追い込まれてきた。別の言い方をすると、自らのドラマをつくりあげてを放棄させられてきた。それらを私はストレーター・システムとして批判的に検討してきた。

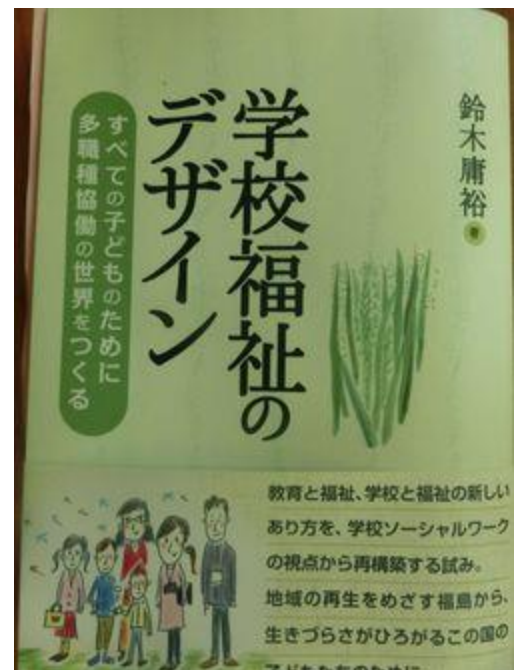
だが、そうした学校のありようを変えようとする営み、ときには風穴を開けるような営みが、子ども自身、教師たちなど、色々な人々の営みとして行われてきた。その一つに、学校のなかに福祉的な視点を持ち込むことがあった。

今やその分野での第一人者の一人となっている著者が、30年近くの自らの研究にかかわる歩みを一冊の本にまとめた。教育学部の授業で、稲づくりに取り組み、トロントの学校ソーシャルワークの取り組みに学びつつ、日本におけるスクール・ソーシャル・ワークを先駆的に取り組み、そして東日本大震災の渦中で多様な取り組みをするなど、ドラマ性溢れる取り組みを、豊富な実践例をもとにまとめ上げ、本書を作りだした。

話はそれるが、実は、私は彼の結婚の仲人を務めた。仲人挨拶の最後に「ドラマです。人生という名の」「二人なりのハーモニー」「は、ひびきあい、広がっていきます」などという言葉キーワードにした詩を語った。

本書は、サブタイトルに「多職種協働の世界」という言葉が織り込まれているが、彼の実践・理論は、そうした世界のなかで渦を広げている。

今後さらに、次のステージのドラマ・協働が展開していくことを確信しつつ、多くの方が本書を愛読されることを希望する。



2017年02月07日

## 本ブログ記事を編集した「教育2008年～2015年」をHPに掲載

このブログ記事のなかの2008～2015年の教育関連記事を編集して、HP「浅野誠・浅野恵美子の世界」に掲載した。<http://asaoki.jimdo.com>

このアドレスにアクセスして、ダウンロードすれば、読むことができる。無論、無料。

2013年までに掲載した以下のものに入っている記事は省いている。それらも、同HPからダウンロードしてお読みください

沖縄論4 沖縄の子ども・教育 2013年6月刊

浅野誠エッセイシリーズ1 フィンランドの教育と仕事 2014年1月刊

浅野誠エッセイシリーズ3 子育て・教育 2014年4月刊

浅野誠エッセイシリーズ4 教育の理論・世界の教育 2014年4月刊

今回掲載したもののなかから、主な記事を紹介しておこう。

- ・標準多様独創 (12回連載)
- ・生活研究と生活指導研究との共通性 中川清「現代の生活問題」 (6回連載)
- ・二つの「やる気」「学習意欲」
- ・中内敏夫『生活訓練論第一歩』日本標準2008年を読む (7回連載)
- ・日本生活指導学会の特性
- ・沖縄の学童クラブが、沖縄の教育にどんな役割を果たすことが期待されるか
- ・目線の高低 子どもとの身体距離 学童指導員の子どもとの関わり方
- ・九州教育学会での私の提案要旨「沖縄における地域と教育」
- ・沖縄教育の課題 (45回連載)
- ・照屋信治「近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方」(溪水社2014年)を読む (3回連載)
- ・「沖縄県の教育史」(1991年発行)の加筆必要点 (9回連載)

連載ものが多いが、とくに2014年から2015年にかけての「沖縄教育の課題」(45回連載)は、これだけでブックレットになりそうなものだ。

ご活用されることを願いたい。

2016年12月19日

## 近年の若者の人間関係と「希望」 土井隆義「ネット・メディアと仲間関係」に触れつつ

秋田喜代美編『変容する子どもの関係』岩波書店2016年には、興味深い論文が収められている。その一つに土井隆

義「ネット・メディアと仲間関係」がある。

著者は、次のように述べる、

「社会的排除を認識する営みからも排除された少年たちは、たとえ劣悪な社会環境に置かれていても、その状況に対してフラストレーションを抱くことがあまりない。希望そのものが格差配分されていることに気づいていないため、その状況に対して反発や絶望を抱くことがない。「周りを見渡してもみんなそうだから」と納得しつつその状況を淡々と迎え入れていく。自分の置かれた現状をごく自然なことと思っていれば、そこにフラストレーションが生じないのは当然のことだろう。

ネット・メディアの発達によって関心対象や生活圏が拡大し、その結果、人間関係も広げている若者の一群が存在するのはたしかな事実である。しかし他方では、ネット・メディアの発達によって関心対象も生活圏も狭窄化し、その結果、人間関係も逆に挟まっている若者の一群が存在するのをもまた事実である。そして、両者の落差が激しくなり、人間関係の分断化も進んでいるのが、今日の人間関係をめぐる現実なのである。

同じ空間で生活を送りながら、しかし互いにまったく異なった世界を生きる若者が増え、両者の分断線は深まっている。それは、ネット・メディア自体がもっている問題ではなく、それを利用する私たち人間のメンタリティの問題である。以上の考察からすれば、いま若者にとって必要なのは、仲間内での絆の強化を煽り立てられることではないことがわかる。逆に、若者たち自身のその傾向にブレーキをかけ、閉じた関係を外部へ開いていかせることこそ重要な課題のはずである。」 p 127-8

こうした分断状況にあるのは、格差による二分化という性格もあるにしても、二分された双方ともに、「人間関係も」「挟まっている」と、授業などで接する学生たちの出会いのなかで、私は感じている。「閉じた関係を外部へ開いて」行く作業は、仲間内に閉じた若者たちのほとんどに必要なことだろう。だからこそ、ワークショップ型で授業を展開し、異質協同の方向を原理として、受講生とともに追求しているのが、私の実践の特質だろう。

その点で、土井論に共感を覚える。と同時に、若者たちがどんな位置にいるにせよ、「希望」を持たないで生きて、「自分の置かれた現状をごく自然なことと思ってい」という現状をどうとらえたらよいだろうか。

この問題は、経済上でいうと、「縮小・定常化している現代を生きている若者たちの反応である」と捉えたらどうなるだろうか、という問いが、私の中に浮かんできた。この「希望」は、成長の時代を生きてきた現在50歳代以上の感覚からでてきたことかもしれない、と疑ったらどうなるであろうか。言い換えると、現代の若者なりの「希望」の持ち方は、異なるのではないだろうか、と問いかけてみたいのだ。

同じことを、沖縄の若者に即して考えてみることも、私には必要だ。沖縄で歴史的に形成継承されてきた「希望」と、近年、とくに「復帰」後、経済成長とメディア、そして学校教育によって誘導されてきた「希望」と、若者の現代生活感覚のなかで形作られている「希望」とは、どうからみあって存在しているのだろうか。

考えてみたくなった。

2016年09月05日

鈴木庸裕・佐々木千里・住友剛「子どもへの気づきがつなぐ「チーム学校」かもがわ出版2016年





著者から、贈っていただいた本だ。スクールソーシャルワークに関する本を、毎年のように発刊している著者たちだ。

日本でスクールソーシャルワークが広く知られ、各地域・学校などに配置されたスクールソーシャルワーカーたちの活躍が気づかれるようになって、まだ10年になるかならないかだ。それだけに、スクールソーシャルワーカーだけでなく、各学校・教職員・関係者が、スクールソーシャルワークをどうおしすすめていったらよいか、手探り状況の色合いが濃い。たとえば、スクールカウンセラー、一般教職員、教育行政関係者、管理職が、スクールソーシャルワーカーを位置付けて相互につながりつつ、学校全体が活かしていく取り組みは、かなり模索的になっている。

その時、「チーム学校」という言葉が頻繁に使われるようになった。

そうした教育現場での現状のなかで、スクールソーシャルワークをどうすすめるかについて、実践に基づいたきわめて具体的なものを提出しているのが、本書だ。

難しい課題に直面している子どもを、教職員・管理職・行政関係者・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーなどが、情報交換・情報交流をして情報共有するだけでなく、その子どもへの新たなかかわりを作りだし、多様に働きかけて事態を前進させ、さらにそのことを通して、「チーム学校」を構築発展させていくといったことを、具体的事例に基づいて、取り組みイメージを提供している。

また、いじめなどにより、深刻な危機に学校が立ち至った時、どうすればよいのかといったことまで、ことこまかに提起している。

こうなってくると、スクールソーシャルワークが、チームとしての学校を現場で作り上げていく上で、大変有益な役割を果たしていることに気かされる。

そういう意味で、スクールソーシャルワークにかかわっている人だけでなく、管理職をはじめとする、教職員や教育行政関係者には、必読といっていいほどの、優れた書籍だ。

今後のさらなる発展が期待できよう。

章立てを紹介しておこう。

第一章 チーム学校とはなにか

第二章 人と人をつなぐ専門性

第三章 学校でのいじめ・自死・事故の問題が「チーム学校」に問いかけていること

第四章 “チーム学校”Q&A スクールソーシャルワーカーはこう考えます

Q1 「担任として日々子どもの様子を見ていて、いじめかどうか判断に迷っています。また、判断に迷うので、具体的な対応が思いつかず悩んでいます。このようなとき、校内のいじめ対策組織やスクールソーシャルワーカーに何を伝え、どのような連携を図っていけばいいのでしょうか。」 このほか、14本のQ&A

2016年08月23日

地域起こしに教育が登場しない不思議

5年前に、「沖縄おこし・人生おこしの教育」(アクアコーラル企画2011年)について書いたが、私が期待する方向への動きは、とても鈍い。

その理由の根幹の一つには、学校における教育内容が、全国画一で「中央」で定められており、地方の独自色を出す「余地」がとても限られていることにある。それは、地方学校教育行政における自治的性格が弱く、中央政府の委託としての活動が多い状況が変えられていないことにも通じている。

そうした歴史が100年以上続いたことから、教育界も地方行政関係者も、さらに親・住民も「沖縄おこし」と教育とを結びつけて考えることが出来なくなっている。

この問題については、2015年名城大学で開かれた九州教育学会のシンポジウムで、招請されて、私は「沖縄における地域と教育」と題する問題提起を行った。それは論文化して、まもなく九州教育学会の紀要に掲載される予定であるので、くわしくはそれをご覧いただきたい。ここでは、関連個所の章節名だけを紹介しておこう。

- 1) 地域脱出とUターン・Iターン
- 2) 沖縄における地域脱出とUターン
- 3) 独自性の強い沖縄における学校教育
- 4) 「沖縄の教育をどうするか」という発想の希薄さ
- 5) 沖縄の大学の特質
- 6) 「沖縄の大学は、沖縄に必要な人材を育てているか?」という問い
- 7) 小中高校での沖縄おこし人生おこしにつながる教育
- 8) 社会教育分野や文化芸能分野などでの特筆すべき取り組み
- 9) ずれ・揺れ・矛盾を豊かさへ

要するに、沖縄の学校・教育界は、国がすすめる人材づくりに集中している。そのため、地域の人づくり、世界の人づくりという視野が、国を媒介にしてしか登場しない。「沖縄おこし」や各地域おこしの教育をどうするか、という議論が欠落しているのだ。

全国学力テストの順位にこだわるのは、その典型例であろう。また、給費奨学金を、難関大学入学者に出すのも、その例になりそうだ。「沖縄おこし」の人材を育てる大学への入学者というように変えてはどうだろうかと思うが、いかがだろうか。

ちなみに、これまでの全国学力テストに象徴される学力は、どれだけの知識をため込んだかを図るものであり、それは大量生産大量消費時代の人材づくりに適合的であった。それが、世界的動向に遅れを取っていると見はじめた中央教育行政は、方針転換して開発創造型へとシフトしようとしている。大学センターテストの廃止が象徴的なことだ。また、いまごろになって、アクティブ・ラーニングを強調し始めたのもその例だろう。だが、それへの準備態勢があまりにも整っていないので、教育現場での巨大な動揺・試行錯誤が出始めている。

2016年08月26日

## 福祉・観光などを含む地場産業を担う中小零細企業の開発創造力向上に対応する教育の追求

地域おこし、とくに沖縄おこしにかかわる教育を考える上で示唆に富んだ次のような記述に出会った。

「個性的で豊かな社会として自他ともに認める欧州大陸中央部に位置する先進諸国(例えば、ドイツ、フランス、イ

タリア、スイス、オーストリアなど)をみると、衣食住に関わる産業領域では固有の文化・伝統を踏まえて、徹底的に民族性・地域性を大切にモノづくりと流通システムが地域に根ざした中小企業と農林漁業者によって保持されている分野である。このタイプの地域経済と製品が民族・地域文化の物質的土台を形成しており、自前の生活文化と豊かな暮らしを体現する製品群である。これらの産業は本来、小ロットで個人的かつ技能熟練が強みの根源となっている分野であり、そのために必要な設備・機械や素材加工も規格化・標準化原理に基づく大企業では担えず、地域に根ざした中小規模の開発型・機械加工経営が主役を演じる領域である。そして先進国のこの分野の製品・サービスは、高度なモノづくり力の基礎として徹底的に民族性・地域性に特化した高級品であることによって、逆に高度な国際性を持ちうる分野(いわゆるグローカリズム)でもある。」p245-6

「イタリア、フランス、ドイツなどの中部ヨーロッパの先進諸国は日本のように文明型産業に特化したグローバル化志向の成長戦略のみに軸足を置くのではなく、成長率の高い文明型産業とともに地域資源と技能熟練を重視した地域内循環型の文化型産業も重視した二本足の産業振興政策を実施しているため、小零細企業の比重は二一世紀に入ってから低下していない。この点は経営基盤が最も脆弱な自営業の推移をみると日本では大幅に減少しているのに対して、ドイツ、イタリア、フランスでは経済のグローバル化時代においても着実な増加傾向を示している点が注目される」p248 吉田敬一「持続可能な地域経済再生の展望と課題」『地域と自治体第37集地方消滅論・地方創生論を問う』自治体研究所2015年

これは、沖縄のことを書いているのではないかと錯覚させるほどだ。

ところで、1980年代までの日本の中小企業というと、大量生産をすすめる大企業の下請けとして部品生産をするイメージが強かった。そして、日本の学校は、全国画一の内容を教えることが長く続いているが、それは、唯一の正解があるような内容の全国学力テストに馴染みやすく、それだけに順序をつけて競争させやすい。そのシステムの中では、上に行けば行くほど、大企業への就職につながりやすく、中小零細企業を希望する学生は少なくなり、中小零細企業は、人材確保に苦戦を強いられてきた。

大企業は数社のみで、地場産業に結びつく中小零細企業が圧倒的に多い沖縄では、学力テストで好成績を収めるほど、県外の大企業に出るといった構図になりがちであった。

しかし、時代はここ20年余りで大きく変化し、大量生産ではなく多品種少量生産に対応する開発創造型の学力が中心的位置を占めるようになってきた。

その点で、上記紹介文が示すような中央ヨーロッパの動向は、沖縄の産業と教育にとって、大変示唆的だろう。

この議論は、毎年担当している沖縄県中小企業家同友会主催の同友会大学での受講生の討論でも繰り返して出てくる強い意見だ。企業も学校も開発創造型の力を、社員に子どもたちにいかに育てるかが焦点的課題になっているのだ。

また、高齢化社会になってきて、産業構造が変化し、高齢者の就業希望者が激増することにかかわっての、同書のなかでの別の論稿での次の指摘も示唆的だ。

「六〇歳前後で定年退職した人々は元気で、要介護状態の人はごく少数である。労働力としても期待できる。自然豊かな地域で第二の人生を歩みたいと考える人は多く、地方はそれらの人々を積極的に受け入れるべきである。後期高齢者になると要介護状態になる人も出てくるが、それとともに雇用も生まれる。

食料、エネルギー、観光、社会保障で地方が積極的な役割を果たすと、地方でかなりの雇用が確保できる。かつての国土計画では工場の地方移転で雇用を確保しようとし、また公共事業費の傾斜配分で雇用を確保してきた。今後は第一次産業、エネルギー、社会保障分野で雇用を優先的に確保すべきである。この分野での安定した雇用は政策によって拡大することが可能である。」p97 中山徹「人口減少社会に向けた農村・都市・国土計画」同前書

以前なら大規模な公共事業に依存することが多かった沖縄の産業構造も、今や大きく変化しており、画一品生産ではなく、開発創造的色彩の濃い対人援助業務や観光業務・サービス業務が激増している。再就職する中高年齢者だけでなく、若者にも、そうした業務への就職が増加している。

そうしたことに資するような学力を育てる学校体質への変更は、緊急課題だといっていいだろう。その点では、教育界には時代感覚の大きなずれが残ってはいはしないのだろうか。教員採用試験に入試産業の問題をそのまま使用するなどというのは、採用者側の開発創造力の低レベルさ、ないしは、そうしたことに力を注がない体質が表れているといえるかもしれない。

2016年06月08日

## お任せHR研究会編著『これならできる主権者教育 実践アイデア&プラン』学事出版2016年

最新刊本を著者から送っていただいた。著者たちは大阪の高校教師たちを中心にしたグループで、高校での教育実践に大変有用な本を次々と出版しておられる。私とのお付き合いが始まって10年を超す。来沖の際に我が家を訪問してくださったこともある。

さて、18歳選挙権がいよいよ実施される。それに伴い、総務・文科両省が副読本を作成配布するなど、高校教育現場はどう教育したらよいか、その対応を模索しているようだ。これまで、高校生の政治参加に大変消極的どころか、抑え込むことに力を入れてきた教育行政が、いやおうなしに従来のものを組み立て直しはじめた。

そんななかで出版された本書は、高校現場教師にとって大変有用だろう。

目次を紹介しよう。

序章 実践のヒント・アイデア100連発

1章 「豊かな政治的教養をはぐくむ」指導計画

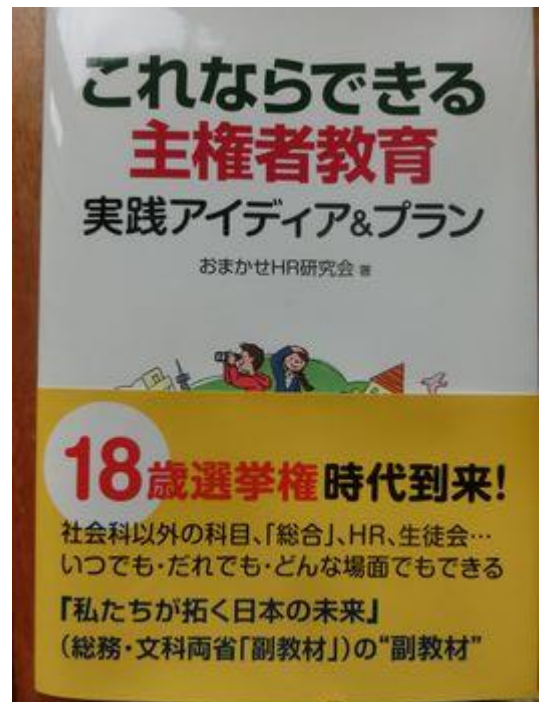
2章 社会科以外の教科での主権者教育

3章 ホームルーム・生徒会の自治活動は、どう主権者教育になりえるのか？

4章 教員の「政治的中立」と高校生の「政治活動の制限」、はたまた「外国人参政権」・・・ほか、いくつかの論点を考えてみよう

5章 座談会 「18歳が投票！ 新しい時代の幕が開く」

これから教師になろうとする教職学生にも有用なので、現在進行中の琉球大学「特別活動の研究」授業でも紹介し、活用を進めようと思う。

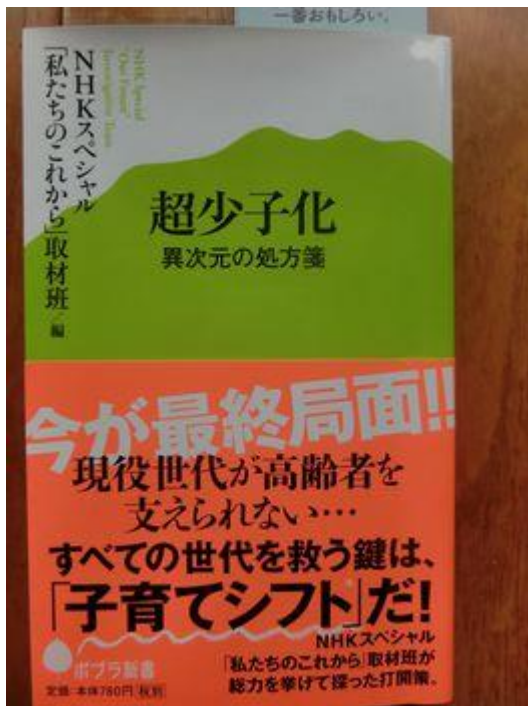


2016年05月31日

## 親世代の仕事のありようが焦点 「共働き 共子育て」 NHK取材班「超少子化」ポプラ社2016年 を読む

今年の2月20日に放映されたNHKスペシャル「私たちのこれから 超少子化 ～安心子育ての処方せん～」を一冊にまとめた本だ。私は、この番組を見ていないが、本の中身は、示唆するものが多く、共鳴できることが多い。

いくつかのポイントをかいつまんで紹介しよう。



1) 非正規雇用者の増加 「非正規雇用者への積極的な支援はされることなく、結婚したくてもできない若者は増加の一途を辿った。」 p 52

「平成27年度版 少子化社会対策白書」は、収入の低さが若者の非婚化・晩婚化に拍車をかけると分析した。」 p 52

2) 「すでに子どもが一人いる家庭で、2人目や3人目が生まれる環境を醸成することだ。実は、そこに男性の家事・育児への参加が大きく関わっていることが分かってきた。(中略) 夫が家事・育児をしない場合では、その(第2子生まれた)割合は11.9%ほどだが、参加時間が長ければ長くなるほど増えていき、6時間以上になると80%を超える」 p 150

3) 「子育てを経験した人たちに取材すると、誰もが「決して子育てをしたくなかったわけではない」と話す一方、なかなか実現できない環境を悔やむ声が多かった。」 p 156

「週に49時間以上働く長時間労働者の割合は、フランス10.8%、スウェーデン7.6%に対して、日本は21.6%。これでは、男性がいくら子育てをしたくてもできない。」 p 156

4) 「中京大学教授・松田茂樹さんは、こうした日本独特の雇用システムのなかで培ってきた労働環境を、少しずつでも改めていくことが不可欠だと語っている。

「日本の長時間労働の根本には、正社員を採用する仕組みがある。企業はまず、ノウハウをもたない新卒の学生、若い労働者を大量に採用する。そこで一から学ばせて育成する文化がある。

また、専門性を極めるといふより、さまざまな部署を経験させながら育成する傾向があるため、労働時間が長くなりがちになる。欧州並みにドラスティックに労働時間を変えようとするれば、雇用システムそのものを大転換するしかない。」 p 158

5) 「社会学者の柴田悠さんによれば、

「いま少子化に苦しんでいるのは、伝統的に男性が外で働き、女性は家庭の責任をもつという性別分業が根強い日本・ドイツ・韓国。一方、少子化を打開したフランスやスウェーデンは、女性が働きやすく、子育てもしやすいように社会を『転換』した。こうした国では、多くの人が働きやすくなることで経済成長につながっている」と話す。

また、企業の同意を取りつけるには、男性が育休取得を通じて「父親としての自覚」をもち、「若い時期にしか味わえない子育ての醍醐味」に触れ、子育ての楽しさを味わうことが、同時に、経済的にもプラスになる、という考え方が浸透する必要があるのではと加える。」 p 164-5

6)「日本社会全体を「共働き・共子育て」ができるように変化させていくことが大切なのだ、と柴田さんは説く。

(中略)

これからの日本を考えるうえで「男性の育児参加」や「働き方改革」の先に、日本社会全体が子育て支援をするよう変化させる「子育てシフト」に舵を切ることが必要だ。」 p 180-1

7)「大学などの学費が高騰し続ける一方で、長引くデフレや非正規雇用の拡大などの影響で、学生たちを支える両親世代の収入も伸び悩んでいる。

しかも、奨学金のほとんどが返済を必要とする貸与型だ。学生たちは、卒業と同時に数百万円の借金を背負うことになる。

そのお金をきちんと返済できるのか。結婚・出産以前に、どの職に就くか、正社員で働けるのかなど、就職自体がその後の人生を決める大きなハードルになってしまっている。

少子化の問題は、出会いから結婚、出産、子育ての段階に至るすべての局面で、企業や社会の多種多様な環境と複雑に絡み合っている。

個人の「選択の自由」の結果として晩婚化・晩産化したと分析できる時代は過ぎ、結婚したくても、子どもを産みたくても、経済的理由からできない不本意な未婚化が進んでいる。むしろ「選択の自由」の幅が狭まっていると言えるのではないだろうか。」 p 188-9

一つ一つの指摘が、思わず「そうだ、そうだ」と叫びたくなるものだ。若い世代自身の責任ばかり追求しようとする動向にたいして、働き方・働きかたに焦点を当てた指摘などは、私の長年の主張と響きあう。

頑張って、長時間働くことが少子化を招き、かえって経済成長を抑え込み、「共働き・共子育て」が少子化打開の焦点になるという本論は、わかりやすい。無論、NHKなので、政治問題としての追求を抑え込み気味であるが、企業を含めて、ここ何十年間の政治のありようが問われ、その転換を示唆しているといえよう。と同時に、一人一人がいかに生きるのかという価値転換を含んだ生活転換を求めるものだといえよう。

2016年03月23日

## 特別支援学校の生徒と教師たちの素晴らしさ 授業参観の仕方 生徒の相互関係を育む

2週間前、西崎特別支援学校のワークショップ型授業を観た。今年は、何度かお付き合いした。生徒対象の私自身のワークショップは、昨年11月22日の記事で紹介したが、今回も印象深いものがあった。

当日は何人かの教師と一緒に参観した。参観したというよりは、生徒と一緒にワークショップに参加したといったほ

うがよいだろう。だから、ワークショップの進行を担当した教師の「共同実践者」としてかかわったといってもよいだろう。

授業参観は、特別支援学校だけでなく、小中高校、さらに大学で、数百回以上かかわった。その際、参観者の位置やかかわりかたについて、多くの提案をしてきた。

通常は、ほとんどの参観者が、教室の後部から、担当教師を見ることに焦点化しており、生徒にしてみれば、後ろから見られているという感じた。そのことが、担当教師だけでなく、生徒に過剰な緊張を与えて、普段とはかなり異なる姿を見る結果になってしまうという弱点を生む。

授業参観では、参観者は、ただの参観者ではなく、この授業を自分ならどうするのかという問いをもって、いざという場合には、担当教師にかわって授業をすとしたら、どうするかというぐらいの構えを持って、臨むことを求めたい。とすれば、教室後部で、担当教師を正面に見て、生徒の背を見るのではなく、教室の多様な場で、時には生徒の中に分け入っていくことも有効だろう。一番お薦めなのは、担当教師の横に立って（邪魔にならないように配慮しつつ）、生徒の顔を見ながら、参観することだ。そして、いざとなったら、担当教師に代わって授業が出来るほどの構えでのぞむことだ。

ということである、今回の西崎校での参観者は生徒の中に分け入り、生徒と一緒にワークショップに参加し、授業を作り上げることに参加していた。だから、担当教師と共同の実践者だという感じなのである。そうしたことを自然体でおられた点も印象的だ。

ということで、授業は大いに盛り上がり、生徒も実に楽しそうにかかわっていた。授業後の話し合いで、普段よりはるかに活躍した生徒がいたことが報告された。ワークショップの良さ、共同授業スタイルの良さ、そして、生徒のやる気を育てる雰囲気の良い、何よりも担当教師の組み立て・工夫の素晴らしさが、そうしたものを生み出しただろう。

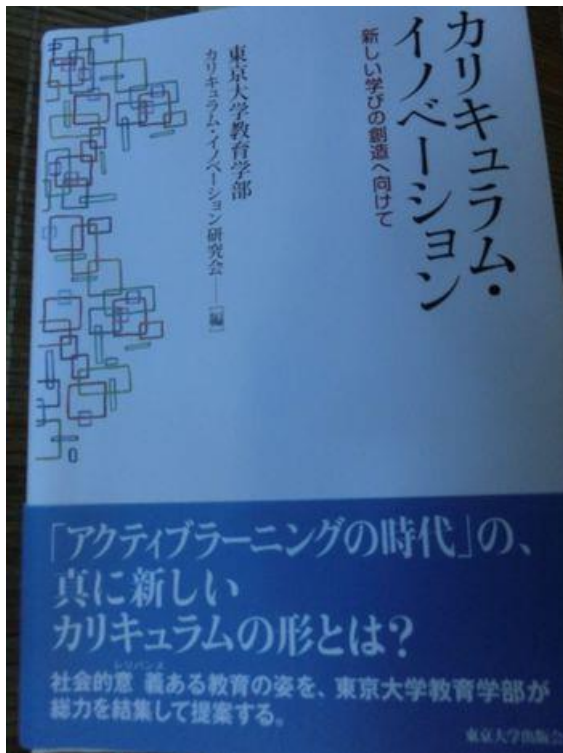
授業後の話し合いで出た話題として、教師の生徒との関わり方についてがある。概して、支援学校では、生徒へのかかわりのきめの細かさが求められるのだが、そのために、教師対生徒の対一のかかわりが大半を占めてしまうことが多いようだ。そのことが、逆に生徒と生徒との相互のかかわりを育てる点で弱点があるように思われる。社会性発達が0歳児レベルの場合、大人との対一関係を育むことは中心的課題だ。だが、いずれ、子ども生徒間の対一関係、さらに、3人以上の複数の相手との関係の力を育てることが必要だ。幼児期から少年期の発達段階にある子どもの場合、それが中心的アプローチになることが多い。

そうした活動を授業内外でどれだけ豊かに育てるかが重要なのだ。その点での創造工夫が重要になるし、ワークショップは、その点でも大変有効になるだろう。

こうしたことは、私が、特別支援教育に旺盛に関わっていた1980年代に考え、主張していたことだが、そのことを久しぶりに思い起こした。

2016年01月27日

「カリキュラム・イノベーション 新しい学びの創造へ向けて」東京大学出版会 2015年を読む



東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会を編者とするこの本は、同学部のほとんどの教員をメンバーとするプロジェクトによる共同研究によってつくられたものだ。それには、東京大学教育学部附属中等教育学校の教員すべてもかかわっているという特徴もある。

カリキュラム・イノベーションをめぐるここ20～30年の世界的な動向のなかで、日本の教育がかなりずれた位置にあるなかで、学習指導要領改訂を迎える機会に対応すべく、積極的な発信と提案を行うという性格をもっている。

大学がこうした提言をすることは、評価できることだと思う。これを受けて、政策当局が今後どのように対応していくか注視したい。

そんな点からいうと、教育研究者だけでなく教育行政関係者も参照検討すべき書籍といえよう。無論、具体的な実践を行う教師、とくに中高教師にも検討していただきたい。みずからの実践の位置をつかみ、方向性を知るうえで有益だろう。

ところで、本書の末尾には、この共同研究の結実物として、提言としてのカリキュラム案が示されている。これを見ながら、私自身が、1980年代半ばに「生活指導の教育内容論」という形で行った提起を思い起こした。子どもの社会性をめぐる教育内容を提起したもので、本書の提起と領域的に重なる部分が多い。

私の提案は、本書ほどの具体的で細分化した提起ではないが、さらにつめていけば、こうしたものにつながる可能性をもつものだった。残念ながら、そこまで具体化して推進はしていない。その意味では、長期にわたって、作業中断をしているといえるかもしれない。

さて、本書には、いくつか個人的興味をもって論稿がある。コメントはしないが、それらの論稿のタイトルだけを示しておこう。

佐藤学「21世紀型の学校カリキュラムの構造」

本田由紀「カリキュラムの社会的意義（レリバンス）」

田中智志「存在論的に呼応する」

小玉重夫「シティズンシップ教育のカリキュラム」

川本隆文「正義とケアの編み直し」

本田由紀「職業的意義のある教育とその効果」

これらが示すように、多面的な分野にかかわる論稿が続く。

2015年12月16日

山本健慈「地方国立大学 一学長の約束と挑戦」高文研2015年を読む



先日の九州教育学会のシンポの際に、シンポジストとして同席した山本さんからいただいた著書を読む。

エネルギーで分かりやすいメッセージが込められている。

大学教育に関しては、すでに50年も空洞化現象が継続しているが、それへの対応は、少しずつ進んではいるが、大変ゆっくりしているというのが、私の認識だ。加えて、政府の大学施策が激烈になっており、国立大学受難の事態が見られる。その中で、和歌山大学学長を務めたあと、現在国立大学協会の専務理事を務めているのが山本さんだ。かれは「地方国立大学を壊死させてはならない」と叫び、鋭い問題提起と行動を展開している。

そうした実践的立場から提起された著書だ。

本書が面白いのは、学長の仕事の前提に、というか礎石になった仕事として、無認可保育所を支える仕事についての叙述が、本書の半分を占めていることである。子育て現場の要求に対応する保育づくりの展開の箇所の叙述は、魅力的だ。

「いまの若い世代は子育てというものに直面して初めて、生活の中の応用問題に直面する。それも人生でもっとも難解な応用問題のひとつに」 p 124

「子育て支援は人生の支援であり、24時間の支援である」 p 125

「制度と専門職は常に陳腐になる」 p 160

「新しいものは常に制度の外にあり、本来の業務の外にある。ところが、いっぺん安定した業務に就くと「この枠の中が自分の仕事なので外のことは自分の仕事じゃない」と考える。それでは制度は保守化し官僚化し硬直化するだけです。」 p 163

「対象と実践が新しい原理と新しい方法を開発するのであって、今ある原理と方法を適用するだけが私たちの仕事ではない」 p 164

「仕事は意欲に応じてやり、責任は給料に応じて取る」 p 178

興味深く、共鳴するところが多い文の連続だ。保育だけでなく、大学運営においても展開されておられるところに、頭が下がる思いだ。

とくに、大学をめぐる対象と実践が構造的に変化し、これまでの「制度と専門職」が「陳腐」になっている今日、重要な提起だ。たとえば、学生は、受験学力・偏差値で自己規定し、良くも悪くもかつてのようなエリート性・誇りが希薄であるだけでなく、人間関係の希薄さは著しい。また、伝統的な学部学科構成や教育システムは、新たな制度の創出を求めている。

また、保護者や学生自身の経費負担に依存するアメリカや日本のようなシステムは、経済的格差が大学教育格差に連動する構図を強めてきている。

そうしたなかで、大学にはいけない人々、あるいは大学にいても知的要求が満たされない人々に対応するのか。

また、学生の変化のなかで、以前より一層の教育力が必要なのに、それに応える力量不足が著しい教員たち。また、タコソボ化の進行が著しい研究世界。

こうしたなかであって、本書が提起するもの、山本さんたちが挑戦していることの意味は大きい。とくに、かれの柔



軟で大胆な発想が、新たな大学の「制度」「原理」「方法」を作りだすことを期待したい。

ちなみに、本書の最後に対談している大東文化大学学長の太田政夫さんは、50年来の知人だ。20年ほど会っていないが、懐かしく思う。

私自身は、学長職のような仕事には縁がなかったというか、避けてきたが、大学論、とくに大学教育論については多くのことを提案してきた。「考えはいいけど、早過ぎだ」といわれ続けたが、それでも、いうべきこと、やるべきことはしてきた。おそらく「新しい制度」や「新しい方法」を、20～40年早目に出してきたはずだ。

今話題のアクティヴ・ラーニングとか初年次教育、あるいは大学生の人間関係を育む『生活指導』などは、1970～80年代に模索提案実践してきたことであり、現在出ているもののほとんどは、私には目新しいものではない。

最後になったが、著者のますますの御活躍を祈念したい。

2015年08月09日

## 「浅野誠エッセイシリーズ7 大学」完成 HP掲載

2007年～2013年に、ブログに書いた大学関連記事を編集して、私たちのホームページに掲載した。

<http://asaoki.jimdo.com>

無料電子出版スタイルなので、上記にアクセスして、ダウンロードしてご覧ください。

全部で、100点余りになるが、主なものを紹介しておこう。

### 大学改革の方向

教師の奮闘より、学生相互の人間関係を豊かにして学習活動を活性化することが焦点

大学授業の小ワザ 1～6

大学専門学校の学費に見合うだけの就職先がどれだけあるのか

大学の授業環境 1～6

文科省「大学改革実行プラン」 1～13.

大学入門科目が多様な学生に対応できているか

若者の居場所と大学の転換

18歳で大学入学の是非 25歳以上の学生の比率を大量増加を

新しい「狭き門」 大学入学へ問題

気になる学生への対応 1～2

学生と大学 1～5

分かれ道の時期の50歳前後の大学教員 1～2

大学生が授業中に「先生、トイレっていいですか」と尋ねる！！

授業にかかわる学生参加のいろいろ

大学一年生 1～2

法学経済学系での入学者減退学者増を食い止める教育 1～2

創造的態勢が未熟な学生に、創造的精神を貫く大学教師の迷い 1～2

「詰め込み学力」よりも「積極的学習姿勢・力量」を育てる  
 大学教育の前提にあわせるか、学生に実情にあわせるか  
 就職活動学生と企業とのミスマッチングというNHKニュース  
 教員免許取得者のうち、教員になるのは5%なのに?!  
 沖縄大学、教育アドバイザーの仕事、少しずつスタート  
 山里勝己「琉大物語」を読む  
 親が、大学生である子どもの「生活のお膳立て」をするのは心配だ  
 大学入試のなかに、「沖縄」問題を含ませる提案  
 大学一年生のファッション・おしゃれ  
 大学と学生とのマッチ、ミスマッチ  
 よく勉強する体育会系学生のことを思い出す  
 学生が創る授業 私が考えた事例アイデア  
 授業ノートの作り方 授業改革への個別相談 沖縄大学で  
 最近の大学教員のすさまじい働き過ぎ  
 「地域と大学の共創まちづくり」(学芸出版社2008年)を読む  
 シブヤ大学沖縄姉妹校づくりの話  
 細分化された知識の集積型学習では力がつかない 大学の科目設定  
 若者たちが学ぶ大学・専門学校の空洞化の進行を憂える  
 『南城物語』『南城学』という科目の授業があったらどうでしょう  
 忙しく働く人と仕事がない人の二極分化 大学教員の例  
 「地域に開かれた大学」を越えて、「地域からつくる大学」へ  
 新しい大学・成人教育を探そう  
 大学選びの知恵

2014年04月29日

## 「教育の理論・世界の教育」をHPにアップロード

ブログ掲載記事などをもとにして、「浅野誠エッセイシリーズ3 子育て・教育」をまとめたことを、4月12日記事で紹介した。ページ数が多くなりすぎたので、その一部を分けたものとして、「浅野誠エッセイシリーズ4 教育の理論・世界の教育」を作成し、HPにアップロードした。

<http://asaoki.jimdo.com>

その前半の「教育理論」は、書籍の紹介コメントを中心に教育理論を扱うが、最後の「教育の二つの顔」は、長期連載したエッセイである。後半は、世界の教育動向を扱った三冊の書籍の紹介コメントだ。

掲載項目を紹介しておこう。

長谷川裕「教育実践における階級・階層論的視点」を読む

竹内常一・佐藤洋作編著「教育と福祉の出会いの場所」山吹書店2012年を読む

久富善之他編「ペダゴジーの社会学——バーンステイン理論とその射程」

茂木俊彦「子どもに学んで語りあう」(全障研2012年)に触れて

「子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ」を読む

『未来をつくる教育 ESD』を読む

新鮮な角度からの教育の提案——『屋根のない学校』本を読む

今日の経済と教育 金子勝『閉塞経済』にヒントをえつつ

教育の二つの顔

1. 必然と創造 専門外の方々への話
2. 「必然」に強く「創造」に弱い学生
3. 必然の学び やる気 競争 自己評価
4. 90年代はじめの愛知の学生たち
5. 「レールを早く走る学力」はあがったが
6. 地球起こし・沖縄起こしの学力は？
7. 脱線1 大学教育改革
8. 脱線2 「インターナショナル」学校
9. 脱線3 子ども若者の将来の職業
10. 格差・福祉 タイムス『学力ってなに』
11. 二つの教育方法の流れ
12. 二つのタイプの受験高校・受験学習
13. 「必然」も「創造」も主体的積極的に
14. 地球起こし・沖縄起こし・人生起こしの学力

経済協力開発機構(OECD)「PISAから見る、できる国・頑張る国——トップを目指す教育」

1. 教育政策立案者・教育界への重大な問題提起
2. コンピュータによるテストに対応できるか
3. すべての人々が「知識労働者」になれる教育
4. 知識労働者を育てる学校には専門的裁量、自由が必要
5. 選抜によって同質の生徒が集まることの問題性
6. 留年・転校による生徒の「同質化」の問題性
7. 若者の自己評価 困難なところへの資金配分
8. カナダ・オンタリオ州の高学力実績
9. 教育界の自主的営みを尊重するカナダ・オンタリオ州
10. 研究創造専門職型 オンタリオ教育界
11. 2009年PISAトップ上海の教育転換
12. 上海の教育改革 研究(探求)型カリキュラム
13. 上海と香港 香港と沖縄 教育改革の比較対照
14. 香港の教育改革 学習の仕方を学ぶ 通識
15. 高成績 フィンランド 格差小 福祉 信頼
16. フィンランド教員の自由裁量の大きさと責任

17. フィンランドの学び 生徒自身が計画 協働重視
18. 日本の教育の評価 先進国動向との距離を暗示
19. 日本の教育の特質 入試 就職 全国統一
20. シンガポール 批判的分析力
21. 教えを少なく学びを多く シンガポール教育改革
22. 高校ですべての生徒をエリート水準へ底上げ
23. 多肢選択型から記述型へ 何度でも挑戦できるへ
24. 教員養成 研究的実践者 研究的に実践
25. 研究と教員 教育行政 大学 教員組合 校長
26. 「官僚的管理運営」から「専門職的な職場組織」へ
27. 生徒間の多様性を生かす 学習者中心 実践サイクル
28. テイラー方式と専門職的な職場環境 学校レベル重視
29. 学校と職場の関係
30. 本書が日本・沖縄に提起すること

『現代アメリカ教育ハンドブック』（東信堂2010年）を読む

1. 私とアメリカ教育
2. 日本の大学の課題とコミュニティ・カレッジ
3. 生徒懲戒
4. ティーム・ティーチング
5. 二重の特別支援教育
6. ミドルスクール

「世界の学力マップ」を読む

1. 産業主義・ポスト産業主義と学力
2. 産業主義と学力と日本・沖縄
3. 習熟度別学級はむしろマイナス！
4. テスト 多文化主義
5. 教師と学校

2014年04月12日

### 「浅野誠エッセイシリーズ3 子育て・教育」のホームページ掲載

「浅野誠エッセイシリーズ3 子育て・教育」を、私たちのホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」  
<http://asaoki.jimdo.com> にアップロードした。自由にダウンロードして読める・見られるので、お気軽にどうぞ。

いろんなことに首をつっこんでいる私。もともとの専門分野は、教育学わけでも生活指導だ。その生活指導からスタートしながらも、教育学のなかの諸分野に踏み込んできた。近年は、教育学からもはみ出し、ブログ記事には、教育関

連以外が多くなった。とはいえ、教育関係についても、多少は記事を書いてきた。

それらを編集してみた。なお、「沖縄の子ども・教育」（2013年掲載）「フィンランドの教育」（2014年掲載）については、別に編集し、すでにホームページに掲載済みだ。また、「若者の生き方シリーズ」（2012年掲載）「大学」（2014年予定）にも、関連記事がある。

また、続編として、「教育理論・世界の教育」をまもなく発行する予定だ。

全体を「子ども・子育て」「学校・指導」「生活指導学会・全生研・高生研」「学力・授業」の4章に分けて編集した。掲載項目を紹介しておこう。

## 子ども・子育て

内閣府編「平成25年版 子ども・若者白書」を読む

1. 指導者たち 自然体験 相対的貧困率
2. テレビゲーム 勉強 自由時間 クラブ・塾・おけいこごと
3. 遊ぶ人数 交際相手がいない 幸福感 悩み 健康

子育てワザ

1. 親自身の教育力を高めることと外注・金銭依存の教育
2. 子どもたちの相互関係・人間関係を豊かにして、子どもの自己教育力を高める
3. 外に開かれた家にして、多様なつながりを育てる
4. 親子密着から分離へ 親による子どもの教育の構築へ
5. 金銭教育 私流のお小遣いと仕送り
6. 親の働く姿を見せ 家事を子どもとともにする

物語の共同創造としての学童保育

遊びから学業・部活・社会生活への発展 学童保育の位置と意義

離婚 子ども 親権

「教育費、年収の37.6%」というニュース

息子たちの子育てを見て、自分たちの子育てを思い出す

自信がある強く立派な親が引き起こしやすい子どもの不幸

保護者・地域といっしょになってすすめる保育

グリとグラの人形とハングル絵本

「正規制度－補完物」という発想を問う 学童保育をめぐる

教育・子育ては物語創造風に

「ストレーター秩序」型研究からの卒業を――「沖縄・若者・将来創造・学校－職業」研究会で考えたこと  
若者・子どもに人気ができる組織

子どもの参画情報センター『居場所づくりと社会つながり』（萌文社2004年）を読む

なぜ、「ムラ（シマ）と教育」に関心をもつのか

広田照幸編著「リーディングス 日本の教育と社会 第3巻 子育て しつけ」日本図書センターを読む

## 学校・指導

体罰問題

1. 体罰行使は、指導の未熟さのあらわれ

2. 体罰常習者の未熟さ 上下秩序組織と体罰
3. 体罰は他者尊重自己尊重を欠いた根性主義を伴いがち

部活と学力

1. 校長の多くが「部活が学力向上の妨げになっている」と認識
2. 量と質
3. 部活 学習 意欲

学校現場での研究 教師の読書量 地域おこしの教育

おまかせHR研究会『スキマ時間の小ワザ100連発』学事出版

鈴木庸裕編著「「ふくしま」の子どもたちとともに歩むスクールソーシャルワーカー——学校・家庭・地域をつなぐ——」（ミネルヴァ書房2012年）を読む

1. ふくしまのソーシャルワーカーたち
2. 支援者を支援するSSWRの相互ネットワーク
3. 枠を超えた協同を作り出すソーシャルワーク
4. フルサービス・コミュニティ・スクール 学校と地域

学校統廃合にあたって必要な検討ポイント

あいさつ指導のいろいろ 沖縄の子どもはよくあいさつするが

小川嘉憲『優しい学校はいかが？』（文芸社2009年）を読む

おまかせHR研究会『ザ・遠足』（学事出版2008年）を読む

航薫平『笑顔の「生徒指導」』（学事出版2008年）を読む

スクール・ソーシャル・ワーク

ジョニ黒 手土産 30年前の話

神谷拓博士論文『教育的運動部活論』を読む

PTA活動の創造 首里地区PTAワークショップ

『「ややこしい子」とともに生きる 特別支援教育を問う』を読む

米軍基地内学校の合同教員研修会への参加

長崎の教育 創造性と管理主義

ゼロトレランス

『教室のピンチをチャンスに変える実践のヒント110連発』

西田純子さんの本

地域に取り組む部活を

中学生の職場実習

『学校に森をつくろう』

生活指導学会・全生研・高生研

湖南学院訪問

大震災と生活指導

発達・発展・開発 私なりのアプローチへ

研究者志望の大学院生の挑戦

『生活指導事典』発刊

『生活指導事典』を読む

困難を抱える若者への対応

「当たり前」ということ

二つの「当たり前」論 多様な議論のなかでの生き方論

研究者個人の生き方と学会の展開とを重ねる

身体性と関係性

子ども自身がつながり、仲間を創る物語を 全生研基調提案

全生研論へのメモ

「複数性」「開かれた闘争」「異質協同」など――2007年高生研大会基調提案を読む

物語創造的な実践を――全生研大会低学年分科会Bの二本のレポートに触れて

自立の危機と進路の問題について考える---全生研大会問題別分科会「自立の聞きと進路の問題」の基調（拡大版）

実践の意味づけ――「大きな物語」への参加を

### 学力・授業

『無駄な抵抗はしないで早く覚えなさい。勉強しなさい』と小学校の先生にいわれた

知識の切り売りばら売りを越えて、物語と人間関係を育む授業・講座へ

「やる気」「学習意欲」を持つ時、持たない時 私の英語学習例

佐藤学「教育の方法」を読む

1. 身体接触の有無と教育方法
2. ポスト産業主義の時代の教室
3. 複式学級は有利だ
4. 「模倣的様式」と「変容的様式」
5. テーラーシステムと授業
6. 学びは社会的共同的なもの
7. 共同の知・学び
8. 多文化と自ら学ぶ能力
9. 二つのカリキュラム
10. 総合学習
11. 能力別編成とカリキュラム開発
12. 「反省的实践家」
13. 改革の展望

井沼淳一郎さんの「はたらく・つながる・生きる」現代社会授業

日本教育方法学会「日本の授業研究」（学文社2009年）を読む

「子の学力 世帯年収に比例」文部省調査はより深い検討が必要

「自分の考えを貫く力」を伸ばすことを、沖縄教育を変える契機に

人の前で自分の意見を出すこと

NHK「学力」討論

松下佳代「パフォーマンス評価」（日本標準2007）を読む

「学力テスト」結果と沖縄



長時間授業・行事縮小で、学力向上・高校サバイバルに成功するか

2014年03月09日

### 藤原幸男先生最終講義

8日、琉球大学で藤原幸男最終講義がもたれた。彼の38年間勤務もいよいよ最後になったわけだ。

ライフワーク資料をもとに、彼特有の誠実で丁寧な語りを20年余りぶりに聞いた。彼と出会ったのは、まさにその38年前だ。その時の雰囲気は今もって持続している。それが彼らしいところだ。

その当初の10年あまり、彼とともにいろいろとチャレンジしたことが、たくさん話され、私もいやおうなしに、当時のことを思い出した。

加えて、35年ぐらい前から、ことあるごとにご一緒した小田切忠人さんも参加していたので、終了後の茶話会は、当時から、現在にいたるまでのエピソード会話が尽きなかった。藤原・小田切・浅野の大胆すぎる?!当時の活動の裏話も連続してしまった。

と同時に、私にとっては、最近の大学、とくに教員養成系大学が直面している事態の難しさを聴く場にもなった。

それにしても、藤原さんは、大病もせずに元気ここまでやってこられた。今後もこの調子が続きそうだ。どんな課題に取り組まれるのか。楽しみだ。



いまや40代後半から60代前半になる、多くの卒業生たちに会えたのも収穫だった。今なお若さを保ちつつ、しかも味わいが増してきた人たちだ。

3月というのは、こうした企画・出会いが目白押しの季節だ。

2014年01月19日

### 「浅野誠エッセイシリーズ1 フィンランドの教育と仕事」のホームページ掲載

2003～2007年に当時のホームページに、2007年以降のブログに綴ってきたエッセイを、分野別に編集して、「エッセイシリーズ」として、ホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」<http://asaoki.jimdo.com> に掲載することにした。

予定としては、芸術、教育、大学、健康・身体・スポーツなどと続け、2014年いっぱい一区切りをつけたい。まず、その第一弾として「フィンランドの教育と仕事」を編集しおえたので、紹介したい。

私は、2010年9月と2011年9月の2回、通算で1ヶ月余り、ヘルシンキを中心にフィンランドに滞在した。その際、多少の調査活動を行った。経済学研究者と一緒にの旅であったが、多様な方々と出会い、インタビューをした。また、滞在前後に多少の学習をした。

それらをもとに、数十本のエッセイを書いたが、それを編集したものだ。フィンランドの教育、とくに学校と仕事とのつながりに焦点を当てている。硬軟織り交ぜたもので、読みにくい点多々あるが、お許しいただきたい。

目次を紹介しておこう

フィンランドの教育講演会

- 1) なぜ「底上げ」ができるか 特別支援教育
- 2) 生徒・教師の共同創造型の授業

佐藤学・澤野由紀子・北村友人編「揺れる世界の学力マップ」を読む

- 1) 産業主義・ポスト産業主義と学力
- 2) テスト 多文化主義

フィンランド予習

- 1) 旅行計画
  - 2) フィンランドと沖縄

3) 産業・経済と教育

4) 福祉

5) 自然・建築・叙事詩など

6) 生活風景

久しぶりのフィンランド予習

- 1) 生活・個人尊重・つながり・墓
- 2) 医療・徴兵・就職・勤務・観光

複式学級は有利だ

沖縄県議会文教厚生委員会フィンランド視察調査報告会

研究メモ

- 1) 文献資料紹介
- 2) 研究視野
- 3) 文献紹介
- 4) フィンランドと日本における、若者の「学校—職業」と高等教育

「フィンランドの高等教育 ESDへの挑戦」を読む

- 1) 本の概要
- 2) 大学教授法の授業
- 3) ESD教育の視野
- 4) 持続可能とフィンランド高等教育
- 5) 社会生活、日常生活における持続可能性
- 6) 肯定心理学 ポジティブ心理学
- 7) 変容的学習 研究ベースでの教員養成教育

## フィンランド元文部大臣ヘイネンさんの話 経済と教育

1. インタビュー生活 『学校から仕事へ』
2. タテ社会でなくヨコ社会
3. 競争と大学をめぐる日本との違い
4. 競争と持続的発展
5. 80%近い大学進学率の背景
6. 実にいろいろな資格
7. 一般大学とポリテク
8. 産業界の教育要求 個人の教育要求
9. 公共サービスと産業界とを結ぶNPO
10. 教育文化省の高等教育担当者の話
11. 教職員組合でのインタビュー
12. エンジニアの労働組合(U I L)訪問
13. エンジニアの労働組合(T E K)訪問
14. 国家教育委員会の職業教育訓練担当者の話
15. ポリテク学長会議でのインタビュー

## 調査追記

1. 職業教育 大学
2. 多様化と職業選択 職業資格 生涯学習
3. 管理職業 塔型社会とヨコ型社会
4. エンジニア教育 労働組合と大学
5. スチューデント・カウンセラーなど

フィンランドのエンジニア教育 協力的知識創造

経済協力開発機構(OECD)「PISA から見る、できる国・頑張る国」を読む

1. 高成績 フィンランド 格差小 福祉 信頼
2. フィンランド教員の自由裁量の大きさと責任
3. フィンランドの学び 生徒自身が計画 協働重視

2013年08月21日

## 久富善之他編「ペダゴジーの社会学——バーンステイン理論とその射程」

2013年6月に学文社から発刊された本で、久富さんの他の編者は、小澤浩明、山田哲也、松田洋介さんだ。一橋大学の久富ゼミにかかわる若い研究者たちによる共同執筆だ。

元になっているのは、バーンステインの4つの著書だが、とくに最後に書かれた、久富善之・長谷川裕・山崎鎮親・小玉重夫・小澤浩明訳「＜教育＞の社会学理論、＜教育＞の言説、アイデンティティ」法政大学出版社2000年、に焦

点を当てている。

私は、階層と教育に関心をもっていた1980年代末から90年代初めにかけて、バーンステインの著書のうち2冊に触れて、刺激を受けたことがある。しかし、残念ながら、上記の最新著書は、本書を通してその存在を知ったくらいだから、当然読んでいない。

そのため、本書は読むと言うよりは、流し読みであり、ここでコメントするには大変な準備不足状態だ。

とはいえ、私がかつて読んだ2冊では、精密コード・制限コードなどをキーワードとして、教育方法においても階層性があらわれる、といった指摘など注目点が多かった。

バーンステインの最新書および本書は、その2冊以上に、教育実践や教育方法にかかわって刺激的なようだ。その点では、教育社会学ではなく、教育方法学関係者がこの本をどのように読んでいるか、あるいは、教育社会学と教育方法学の両分野の研究者の対話が行われると良いだろうと思う。

とはいっても、本書が日本の教育実践に触れていないわけではない。数編が、主として執筆者自身の教育実践を分析対象として論を展開している。それは主として、バーンステイン理論を使って実践を読むとどういうことになるか、というアプローチである。それがさらに、実践展開への提言を含んで書かれると、興味深いことになるだろう。あるいは、日本における主傾向を代表とする見なされる実践を素材にして論じられると、より一層注目すべきものになるだろう。

直接的なコメントにならなくて、恐縮だ。

私にとっては、学習研究すべき課題が、また一つ加わったといえよう。ワークショップ型授業の特性の検討、あるいは現在再開しつつある沖縄教育の歴史的的分析などにかかわって、有益な視点が加わりそうでもあるからだ。

2013年08月08日

## デジタル・アーカイブの時代 私の「大学と教育」掲載論文がインターネットで読める

先日、名古屋大学高等教育研究センターから連絡があった。つきあいが無い所だったので、なんだろうと思った。すると、もう閉鎖になった東海高等教育研究所の刊行物「大学と教育」のデジタル・アーカイブを作成中だが、私の論考も掲載してよいかどうかの許諾を求めるものだった。

時代が進展して、デジタル・アーカイブの時代になっていると言われるが、私自身に関して初めて実感する出来事になった。

掲載論考は、次の三つだ。

7号（1993年）大学改革と大学教育実践 - 授業実践を中心にして

34号（2003年）これまでになかった大学づくりの本流としての〈参加〉

40号（2005年）大学授業改革の現段階と課題 - 各地の大学でのFD企画へのかかわり体験をふまえて

アクセスは、次の所だ。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/projects/tokaiken/>

『大学と教育』は、1990～2010という「大学教育に変化の嵐が吹いた時代」にあって、先駆的な動向の一角を占めた重要なものだ。

2013年07月23日

## 茂木俊彦「子どもに学んで語りあう」(全障研2012年)に触れて

6月初めに久々にお会いした茂木さんから著書を送っていただく。

障害を持つ子どもへの対応・ケア・指導をめぐるの、最新情報に基づく、大変わかりやすくなじみやすい本だ。関係者の御一読をお勧めする。章タイトルを紹介しておこう。

- I 障害にある子どもの理解のために
- II 教育目標と発達段階に応じた実践
- III 分かる喜びに応える教育を
- IV 子どもたちの現在とインクルーシブ教育

タイトル「子どもに学んで語りあう」は、著者の願いと主張を込めたものだ。

これに触発されて、一つ考えた。

本書のなかでも出てくるが、現場教員は大変繁忙のなかで苦勞している。そのことが実践を事務的なもの管理的なものにしがちでさえある。そうだからこそ、「子どもに学」ぶ姿勢が重要な意味をもつ。

その繁忙さは、子どもたちの生活スタイル・生活スタイルと、ケアする人・教育する人のそれらとの間に距離を作りさえする。その際、子どもたちを自分たちの方向に引き寄せると言うより、両者の間の距離を縮める、あるいは、むしろ子どもの方に近づくことが求められる。

無論、繁忙化の背後には、政策的なものがあるのだが、その変更を求めるだけでなく、繁忙化をすすめる政策の浸透に歯止めをかけられないライフスタイル・リズムをもってはいはしないのか、という問いかけも必要なのではないか。

世の中は、物質的には豊かになっているだろうが、生活の上では貧困化している。あるいは格差が開いている。そうしたものに対処していくうえで、子どもたちのゆったりしたスタイル・リズムに学ぶような姿勢を、ケアする人・教育する人には求められているように思われる。ゆったりしたスタイル・リズムは豊かさを構成するものだと私は考える。

2013年06月05日

## 「浅野誠沖繩論4 沖繩の子ども・教育」HPへアップロード

浅野誠沖繩論シリーズは、1. 沖繩論 2. 沖繩の暮らし 3. 沖繩の歴史・民俗と出してきたが、最後に、4. 沖繩の子ども・教育2003-2013 を完成させた。

私は、もともと教育学、とくに生活指導を専攻分野にしているが、1972-1990年の第一次沖繩生活期では、沖繩の教育に関わって多くの事を書いてきた。代表的なものとしては、「沖繩教育の反省と提案」(明治図書1983年)、「沖繩県の教育史」(思文閣1991年)がある。

そして、2003年に中京大学を退職して沖縄生活を準備し、2004年9月から第二次沖縄生活をしてきたわけだが、この期間においても、沖縄の教育についてたくさんを書いてきた。そのほとんどは、旧HP（2003-2007年）とブログ（田舎暮らし・人生創造・浅野誠2007-2013年）に掲載した。

それらを集約したものが、今回のものだ。

また、それらの集約編集を含んで、「沖縄おこし人生おこしの教育」（アクアコーラル企画2011年）を発刊した。したがって、今回の集約には、上記著書に掲載したものは省くようにしたが、一部、同書の準備作業的性格をもつ文も含まれている。

関心のある方は、右欄「お気に入り」のなかの「浅野誠・浅野恵美子の世界」をクリックしてください。

目次を紹介しておこう。

## 1. 子ども

- ・健康な学生たち
- ・高校生 ノリ・夢・行動 自らの学びを組織することへ
- ・沖縄子ども研究会へ期待
- ・近年の子どもにかかわる組織の発展——沖縄子ども研究会結成——
- ・『沖縄子ども白書』編集方針に思う
- ・おきなわいちば28号「おきなわの子育て」特集
- ・沖縄独自の教育創造へ——子どもを守る文化会議沖縄集会の分科会での私の発言
- ・『沖縄子ども白書』（ボーダーインク社）を読む

## 1. 福祉と教育

## 2. 都市化と子どもの人間関係

## 3. 政策と実践

## 4. 今後への提言

- ・沖縄子ども研究会から沖縄子ども支援ネットワークへ
- ・“〇〇高校って、バカ校だよ”というおしゃべりにびっくり
- ・野本三吉『戦後沖縄子ども史』（前篇）を読む
- ・野本三吉「沖縄・戦後子ども史」を読む

## 1. 加藤彰彦さんと私

## 2. 子どもの福祉と教育

## 3. 学童保育・子育て協同

## 4. ひとり親家庭

## 5. 里親

## 6. 育児支援と沖縄の三層社会

## 7. 家族の閉鎖孤立と児童虐待

## 8. 子どもたちの発育・能力・逸脱行動

## 9. 教育

- ・「経済的事情で進学をあきらめる生徒が増えた」というニュース
- ・「子どもの見方・育て方」与儀小学校講話

## ・部活・学力・遊び

1. 校長の多くが「部活が学力向上の妨げになっている」と認識
2. 量と質
3. 部活 学習 意欲
4. 「児童 放課後は多忙」

## 特 学童保育

- ・南城市学童保育連絡協議会スタート
- ・会場いっぱいの南城市学童保育連絡協議会設立総会
- ・沖縄県学童保育支援事業報告会
- ・学童クラブわんぱく家
- ・学童保育「わんぱく家」風景
- ・みなみ学童クラブ 南城市学童保育クラブ訪問1
- ・當間学童クラブ 南城市学童保育クラブ訪問2
- ・「トトロの森で遊ぼう」「南城市おじゃまします」 いろんなアイデア噴出 南城市学童保育研修

## 特 保育

- ・親子・保育者とともに楽しいワークショップ グッピー保育園で
- ・『保育実践の記録のとり方』のワークショップ
- ・保育実践記録講座 2時間で参加者全員がほぼ書き上げる

## 2. 学校 教師

- ・沖縄での新しい学校づくりの息吹
- ・沖縄教育の論議の場と特別活動縮小のあおり
- ・これまでにない子どもの行動に旧来のやり方で対応する教師のズレ
- ・「復帰時と現在、大きく変わった点、目に見えて変わったこと、学校現場で変化したこと」

### という質問に対しての私の意見

- ・私たちのまわりには沖縄工業高校出身者が多い なぜ？
- ・高校「合格基準広げ定員確保を」・・・新聞のトップニュース
- ・沖縄工業定時制の給食風景
- ・テスト依存の悪循環
- ・若手教員の苦勞への応対に苦勞する中堅ベテラン教師の話
- ・沖縄県立高校再編計画議論への私の問題提起
- ・ポリビア学校への沖縄県派遣教師継続要請の方々
- ・ヌエバ・エスペランサ校創立50周年誌『希望』を読む

## 3. 教育実践

- ・戦跡・平和教育などなど 興味深い語り合い
- ・沖縄らしい人間らしい教育を 民間教育研究団体の集まりでの感想

- ・沖縄戦学習についての津多則光さんの問題提起へのコメント
- ・小中学生のすごく印象的な演劇「優しい名のもとに」
- ・否定面の指摘や政策批判より、提案的实践への関心・期待が高い
- ・「本の音読」から「自分の文を発表する」へ

#### 4. 学力問題

- ・沖縄起こし・世界起こし・人生起こしの『学力』
- ・沖縄の学力問題のインタビューを受けつつ、考えたこと
- ・沖縄の学力問題 記事コメント「論議」
- ・コールセンター型雇用の先行きへの心配 沖縄に必要な学力・教育
- ・“豊かな人間関係「学力にプラス」”という新聞記事に注目
- ・沖縄と子どもたちの将来創造に結びつけて、学力問題を考えよう

#### 5. 沖縄おこしの教育

- ・沖縄的なものを学校のなかにとり入れることは進んだが
- ・大学の教職演習での「10年後の沖縄」の討論
- ・学校でウチナーグチを教える 琉球語意識調査に触れて
- ・地球起こし・沖縄起こし・人生起こしの担い手を育てる学校へ
- ・沖縄教育はなぜ、チャンプルーになってないのか
- ・『討論 沖縄の教育を考える』 「幻の本」
- ・沖縄における教育格差をどう考えるか
- ・教育とからんだ沖縄の階層・格差・貧困研究の未熟さ
- ・大学入試のなかに、「沖縄」問題を含ませる提案
- ・沖縄の企業関係者からの教育への発言が少ないが——同友会大学
- ・沖縄県議会文教厚生委員会フィンランド視察調査報告会
- ・「労働集約」型産業からの転換 「労働集約」型教育からの転換
- ・沖縄教育・沖縄教育史研究会 私の新刊本を材料に熱心な討論
- ・大学受験学習 「沖縄おこし・人生おこしの教育」補論
- ・いろいろな感想などが寄せられてくる 新刊本補論
- ・保育セミナーで「沖縄起こし・人生おこしの教育」の話をする
- ・退職教員たちの「沖縄おこし・人生おこし」の研究会
- ・沖大セミナーでの「沖縄おこし・人生おこしの教育」討論
- ・沖縄教育は、発展途上国型か？ 先進国型か？ 独自型か？ 沖縄教育論1
- ・発展途上国のモデル型 沖縄教育論2
- ・沖縄と上海との教育交流 二つのエリート教育 沖縄教育論3
- ・『指示待ち人間』から創造的人材へ 沖縄教育論4
- ・共同創造型授業へ 沖縄教育論5
- ・教師の共同研究による実践創造 沖縄独自の創造 沖縄教育論6
- ・入学試験・就職試験改革へ 沖縄教育論7



- ・大学高校教育は、学校独自の入学試験から始まる 沖縄教育論8
- ・学校以外での沖縄教育 沖縄教育論9
- ・学校・企業・社員どんなちからをつけるか 同友会大学

## 6. 沖縄教育史

- ・戦争直後の子ども・学校づくり
- ・齋木喜美子「近代沖縄における児童文化・児童文学の研究」(風間書房)を読む
- ・藤澤健一「沖縄／教育権力の現代史」(2005年社会評論社)を読んで考えたこと
- ・藤澤健一「近代沖縄における自由教育運動の思想と実践に関する基礎的調査研究」を読む
- ・近藤健一郎さんの可能性にあふれた沖縄教育史研究
- ・これからの沖縄教育史研究の課題と視点
- 近藤健一郎「近代沖縄における教育と国民統合」(北海道大学出版会2006年)に触発されて—
- ・戦争責任の問題・・・沖縄教育史研究の未開拓分野
- ・名護の教育史にかかわる里井洋一さん、森田満夫さんの論考に触れつつ
- ・ウチナーンチュの生活感覚・沖縄教員の葛藤と結び合う沖縄教育史研究へ
- ・沖縄教育史時代区分への仮説—その1
- ・沖縄教育史時代区分への仮説—その2 人口と生活・生産の視点から見る
- ・沖縄における芸能史と教育史
- ・比屋根照夫「戦後沖縄の精神と思想」(明石書店2009年)を読む
- ・南風原小学校130周年 裏話
- ・沖縄の児童文学についての齋木喜美子さんの諸論を読む